
漆黒の戦神

pigeon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の戦神

【コード】

N99260

【作者名】

pigeon

【あらすじ】

ある日変な裂け目に引きずり込まれ、着いた先は剣と魔法のありふれた世界だった。
帰り方も分からない中、目の前に獣耳が……

絶望の中を生きて行く人達を目の当たりにした時、ある強い決意が生まれる。

異世界TRIP系主人公最強物です。

R15は保険です。

おもに戦闘シーン描写のためです。

第一話 始まりは唐突に

羽白 空矢は入っているサークル（あれをサークルと言って良いのか疑問があるがな……）が終わり、自宅であるアパートに向かっている途中だった。

陽は短くなり、今のように帰るのが少し遅くなっただけで、すでに周りは暗くなってきた。

父親は4年前に事故で、母親はその3ヶ月後に病気で他界しているため、今はアパートで一人暮らしをしている。

《まあ、だから遅くなっても心配する人はいないけどな》

そんな自嘲的なことを考えながらも、足は家であるアパートへと向かうべく、いつもの通り慣れた路地へと歩みを進めていく。

一時期は祖父とも暮らしていたのだが、あれと暮らしていたら命が幾つあっても足りないと思った空矢は、早々においとましたのだ。た。

彼女いない歴〃人生の空矢にとっては、誰もいない家に帰るのはただ気が重いただけだった。

そのため、いつもよりも幾分か足取りが遅くなっていた。

空矢は学校生活も至って普通で、友人関係もいたって平凡だ。

成績は中の下といったところだが、妙に偏った知識の数々は他の人々の追隨を許さないほどだ。

《まあ普通に生活していたら必要になることもない知識ばかりだけだな》

そんな現状だからか、過去を振り返っていて、何か面白そうな非日常的な出来事が起きないだろうか、などと考えてしまったのだろう。

それが原因なのかは分からないがもしその時考えていなければ、もしかしたら空矢はまっとうな人生をおくれていたかもしれない。

空矢が気付いたのは、いつもの通り慣れた路地に入った時だった。それは車がぎりぎりすれ違うことのできるぐらいの車幅の路地のなんなかに鎮座していた。

真黒い何か。

いや、真黒い空間とでもいうべき代物だった。

横幅は路地いっぱい、縦幅は二メートルぐらいの光をすべて吸い込んでいるかのような漆黒の空間だった。

ひそかに脈打っているかのように感じれるそれに目を奪われていると、急に空間が歪んだかのごとく、空矢の視界が軋んだ。

「な、なんだ！ぐっ……、じじいに本気の気をあてられたみたいだ。体が言うことをきかねえ」

まるで金縛りにあつたかの様に、その空間から発せられる異様な気配が空矢の体の自由を奪う。

そればかりかまるで引きずり込もうとしているかのごとく、何かしらの力が働いて、少しずつ、少しずつ空也の足が地面をつかめきれずに滑り出している。

「まずい、何が何だかよく分からないがとにかくやばい。このままじゃあのへんな黒いとこまで引きずられちまう。なんかやばげな雰囲気満載なあれには近づきたくねえ……！」

いつも心がけている冷静な思考が、半ばなくなりかけているのにも気づかず、その異様な気配に抗って体を屈め、路地のアスファルトを四肢で掴んだ。

傍から見れば異様な風景に映るだろうが、本人は至って真剣なため

気付いていない。

それに周りにはだれもいないためそれを教える者もない。

いったい何分たつたのかも分からなくなってきたころ、急に引力らしき力が弱まった。

いまだ体の自由を奪っている異様な気配は残っているものの、これならどうにか動けそうだと裏を振り返った瞬間、今までのとは比でないほどの強い力で体が引っ張られた。

油断して裏を振り返っていたことも併せて、踏ん張る力が足りず、今までの努力をせせら笑うかのごとく体は黒い空間のほうへと一直線に飛んで行った。

こうして空也はこの世界に別れを告げた。

自分から望んだわけではなく、その日その時間に運悪くその路地に居合わせたというだけで。

空矢が最後に見たのは、最初よりも小さくなり、人が二人立てるか立てないかという大きさになった黒い丸。

そして一言。

「ふえ、フェイントってあり？」

とつぶやいた。

そのあとすぐに裂け目は程なくして消え、痕跡は跡形もなく。

こうして一人の青年はこの世界から消え、警察の尽力のかいもなく、この事件は未解決として御蔵入りしてしまったのだった。

第二話 異なる世界

「んっ、んん」

気がつくとすぐ、いつもの条件反射（こんなのもあっても喧嘩ぐらいでしか使えないけどな）で立ち上がり、すぐに周りの気配を探った。おそらく窓がないためだろう、周りは暗く、部屋に一つある扉の隙間から差し込む光のみが唯一の光源だ。

夜目に自信がある俺としては十分な光量だ。

前に友人に後ろから襲われ、そのまま気絶しているうちに何処とも知れぬ山中に置いて行かれた事があったのだが、今回もおなじだろうか。

今回は四方を石作りの壁で囲われた、教室くらいの大きさの部屋だった。

ひとまずは大自然の中ではないみたいなので安心した。

あの時は一週間も彷徨ってしまったからな。

後から聞いた話だと、置いてった本人が忘れていたそうだが……。

まあちゃんと報復はしておいたが。

しかしそうは言っても油断できない。

この部屋の外がどうなっているのか分からないからな。

そう考えているうちにも、自分の体に異常が無いかを確かめている。

《……ひとまずは大丈夫なようだ》

少し体を動かしてみると、いつもよりも調子が良いくらいだった。

一体どれだけの間気を失っていたのだろうか？

記憶を遡ってみると。

「あっ、そういえば……」

帰宅途中、裂け目に引きずり込まれたことを思い出した。

《あれは何だったのだろうか？》

あんなもの人為的に作れるとは思わない。

これで晴れて友人達の無罪が確証されたのだが。

はて、誰がこんなことをしたのだろうか。

《まあそれは置いてだ。まずはこの現状をどうにかしなくちゃな》

壁まで歩いていって軽くノックしてみる。

“コツコツコツ”

鈍い音が返ってきたところを見ると、とても厚い壁みたいだ。

どうやら、何か建物の中の一部屋らしい。

今更だが床や扉を見てみると、埃もなく、綺麗に保たれている。

扉のつってや床が擦り減ってないところを見ると、頻繁には使われてはいないが掃除はされているといったところか。

《この分なら誰か人がいそうだな》

あくまで憶測にすぎないが、これで少し希望が持てた。

さて外に出ようか、と思って扉のほうに歩いて行くと、何やらガチャガチャ足音をたてながら、こちらに向かってくる者がいるようだ。ガチャガチャというのは、お玉を沢山東ねて動かした音を、もっと鈍くしたような感じだ。

つまり、金属の音ということだ。

《こつちに向かってきてるな。今すぐにも人とコンタクトをとりたいが、言語がわかるとも限らない。

ん、どうしたものか……

まあ一先ずは様子を見てからのが良いかな》

そう考えた俺は部屋の奥の隅に移動し、気配を消した。

しかし、そう簡単には行かなかった。

なんと足音はこの部屋のまえで止まったのだ。

部屋の前にとまった足音は、そのまま少しガチャガチャ音を立てていたがすぐに静かになり、少し荒い呼吸音のみが聞こえるようになった。

《二人……いや三人か》

先ほどの足音と呼吸音から、扉の外にいる人数を推測していると、急に空気が張り詰めた。

《む？》

この感じは実際に体験しないと分からないだろうが、敢えて言葉にすると、空気がガラスになった、といったところか。

《まあ、俺には関係ないが。

それより足音達だな。

俺はこんな空気を作るやつらに睨まれるようなことをした覚えが無いんだが……》

そう一人で考えていると、足音達が動き出した。

“ガン”

部屋の扉を蹴破って現れたのは、鉄の塊だった。

「はっ？」

目の前の光景に驚き、つい呆気にとらわれてしまった俺は、無意識に声をもらしてしまった。

現代では滅多に見ることが無いであろう、西洋風のフルアーマー。部屋の中が暗いため、流石に夜眼が良い俺でさえ、相手の顔を見ることが出来ないが、どうやら兜もかぶっているようだ。すると相手が声をかけてきた。

「お前が先ほどの魔力の発生源か？どちらにしろこんな所にいるのだから、怪しいがな」

といいながら、笑みを向けてきた。

笑みといってもヘルムをかぶっているから見えないが、なんとなく雰囲気がいやらしそうな物だ。

《こりや面倒事だな……》

やる気なさ気に頭を下げたら、何を勘違いしたのか、馬鹿にするようにいった。

「はっ、スパイならスパイらしくあきらめろや」

そう言ったとたん抜剣し、そのまま上段に構え、振り下ろした。

普通の日本人なら、此処で何も出来ないまま切り捨てられていただろうが、空矢は普通ではなかった。

「えっと何て言ったら良いのかな。俺はスパイじゃ無いし、そのなんだ、魔力とやらには心当たりはないぞ」

そっぴいなから、相手の剣の腹を、両方から合掌するように手で挟んだ。

あたかも真剣白羽取りのように。

しかし違つところが一ツだけあつた。

“キーン”

剣の挟んだところから先が折れ、遠くに飛んで行つた。

それをみた三人の鉄塊達は、眼を見開いて呆氣に取られていた。

それもそのはず、剣のスピードに合わせて、それも刃の弱いところを的確に、少しずらした手を打ち付ける。

しかも剣の弱いところといつても、所詮鉄の塊。

下手な力では、手首を痛める。

まあそのあと脳天に剣をくらうのだが。

「おいおい今の殺す気だつたら」

俺の問い掛けに、剣を折られた目の前の鉄の塊1が反応した。

「は、反教会勢力のやつらと他国のスパイの生死は発見者の自由に決まつてるだろう！」

そっぴいなから、腰から抜いたナイフを、逆手に構えたまま振り上げようとした。

「せつかく一回目は殺さないようにしてやったのに。はあ……。そんなに死にたいのなら良いけどな」

そっぴいって、霞んで見えるほどの速さで、ナイフを持ったての手首を打ち付けナイフを奪い、お返しとばかりに鎧と兜の隙間に突き刺し、抜くと同時に後ろに飛びのいた。

首を保護していた鎖帷子を、力技でぶち抜いたので、ナイフはもう使い物にならなくなっていた。

それを遠くに放って、血をドクドク流しながらゆっくり崩れ落ちる鉄の塊1をみながら、今だ何があったのか理解できていない鉄の塊2と3に、

「まだやんのか？手えださなきゃ俺もやらんぞ」

そういつてやると、二人とも抜剣し、こちらに切りかかってきた。

「何でそう死に急ぐかね」

そう年寄りめいた言葉を呟きながら、かかってくる二人を見据えた。2が1のいまだヒクヒクしている死体を乗り越え、手の中の剣を横にして、薙ぎ払らって来た。

それを地面すれすれまで屈んで避け、そのまま流れるように手を付き、逆立ちをして、そのまま止める事なく踵を振り下ろした。

「グファッツ！」

そして2はそのいまま崩れ落ちた。

よく見てみると、兜が凹み、頭にのめり込んでいる。

そんな事もお構いなしに、3が2の影から現れ、剣を真っ直ぐに持ち、突き出してきた。

それを見切って半歩横にずれてかわし、剣を持った手を掴み、こちらにもつと引くとともに、手首を無理矢理3の首のほうに向け、その状態のまま足を払い、おもいつきり床にたたき付けた。自分の剣が首に添えられていたので、自分の体重と鎧の重さによって、剣の半ばまで首にめり込んでいた。

「かつ、はっ」

それを冷めた眼で見っていた空矢は、廊下の向こうから聞こえてくる音に気付いた。

「はあ。今日はなんて厄日なんだ。てかホント此処何処だよ。まあこれ以上こんな奴らに構ってられねえな。ひとまずこの建物からおいとますっか」

そう言つて目の前に転がる鉄の塊を避けて、廊下に出て行った。部屋を出た俺は、一先ず音の聞こえない方へ逃げることにした。それにしても此処は何処なのだろう。

先ほどの人は、結局顔を見ていないので、人種が分からなかった。廊下も石作りで、壁にかかっている光源は、すべて松明ときた。

《どっからどう見ても、西洋の城んなかとか見えないな》

そう考えながら、迷路のような廊下を歩いて行った。

床の擦り減り等を見て、人通りの多い所を目指してあるいていくと、目の前から一人歩いてくる人がいた。どうも年配の使用人らしい。しかもメイド服を着ている。

《さて今度はどんなかな?》

そう思つてると、目の前まで歩いてきたメイドさんが話し掛けてきた。

「どづいたしたのですか?こんな所で?」

そう言ってこちらに聞いてきた。
茶髪の彫りの深い顔立ちをした人だ。

《どうみても、日本人じゃないな。

するとここは、外国か？てかいまだ騎士がいる国とかつてあるのか》

「此処まで迷い込んでしまう方は珍しいですね。迷ってしまったのでしたら、入口近くまでご案内致しますよ。それにしても珍しい髪と眼です事。服もここらでは見ませんね」

そういつて、にこやかに笑った。

《この人は他意はなさそうだな。全員がさっきのみたいな奴じゃ無いことがわかって安心だ》

そういつて、その言葉に甘えさせてもらうことにした。

「出来れば案内していただけると嬉しいです。実は此処が何処だか分からなくて、困ってたんです」

「そうですか。では私に付いて来て下さい」

そういつて歩き始めた。

「その服は何処の物なのですか？ここらではあまり見かけませんね。髪も珍しいですね」

「そうですか。私の居たところでは、皆このような服ですよ」

そういつて、

「ということ、海を渡っていらした方ですか？」

「……海を渡って？」

「その反応では違うようですね。もうひとつの大陸から、命懸けでこちらまでいらす方が、たまにいるのですよ」

よく分からなかったが、此処は合わせておこう。

「そうなんですか。でも私はこの大陸生まれですよ」

「そうでしたか。失礼致しました。あ、此処まで来れば大丈夫ですよ。此処を突き当たりまでいけば、玄関ホールです。それでは私は此処までということでは」

「そうですか、ありがとうございます」

そういつて挨拶を交わし、今の会話の内容を考えながら、門まで来た。

人通りは多く出るのに手間取ったが、すぐに流れに乗って門の外まで出ることが出来た。

門を出て分かったが、やはり想像通り今いた建物は巨大な城だった。

「なんだこりゃ。こんなでかい城が現役とは。此処は確実に日本じゃないな。第一西洋風な作りだし」

そう呟きながら、城壁もくぐり抜けた。

「……………んっ!?!?」

《お、俺はタイムスリップでもしたのか？》

そう思わずにはいられない光景が広がっていた。石作りの道と建物。そう中世のヨーロッパの城下街という光景があった。

むろん生活感が溢れている。

そして今俺は新たな可能性が頭の中を過ぎった。

普段ならそんな事を思い付いたりしないだろう。

だが、目の前の光景を見て確信した。

まず人間達の髪や眼の色だ。

そう、カラフルなのだ。

赤青黄緑紫…… e t c .

人間のDNA的にも有り得ないが、みんなまとめて染めていると思えば、説明できなくもないが……。

いや、眼はカラーコンタクトか？

《まあいい》

これまでの情報をまとめると、『此処は外国』説の他に、とんでもない説を思い付いたのだ。

そう、『異世界』説を。

第三話 出会い

あれから、この町を見て回ってみた。

見れば見るほど、此処は地球でないという確信が深まってくる。

動物達も見たことがない品種だし、お金も何か硬貨を使っでいて、紙幣もなく文明の利器と言うべきものもなかった。

《さて、これからどうするかな。金も無いし、ましてや異世界だとしたら、身寄りも無いときた。まあ、何か仕事でも見つけるか。幸い、体力やらには自信があるしな。定番の冒険者辺りがだとうか？》
そう思っで気を入れ直していると、前方が騒がしいことに気付いた。

《なんだなんだ？喧嘩か？》

とくにすることも無いので、野次馬根性丸出しで見物してみる事にした。

近づいてみるとどうやら、喧嘩というよりは皆で誰かを口汚く罵っているらしい。

《何かやらかしたのか？》

今の自分の状況を考えると下手な事に首を突っ込むのは得策ではないだろう。

しかしそこはやっぱり現代っ子。

好奇心に勝るものはなかった。

一応は周りを気にしながら無理矢理人垣の中に入って行っだ。

《一体何人いるんだ？これは集まりすぎだろう》

そう思いながらも進んで行くと、思いもかけない光景があった。それは真ん中で泣く少女をよってたかつて罵つたり、物を投げ付けたりする人々だった。

助けたいが、現状をよく知らないで関わりと最終的には引つ掻き回してしまつて、余計ややこしくなつてしまつたろう。

そこまで考えて、エスカレーターしないようだったら手をださないようにしようと思つた。

自分の身が一番だからだ。

少し下がって見ていると、ちらちらしたかんじの青年が三人出てきた。

《あー、こりゃいやな雰囲気かひしひしと。よし、その時は助けに出よう》

そう決心して体に力を入れ、温めはじめた。

そうこうしているうちに状況は進み、青年達は少女を囲み話しはじめた。

「何でこうなつてんのか分かつてんよな！薄汚ねえ奴あこの街から出ていけ！それともなんだ？突き出されたいのかあ？」

「お、お願いです。お願いですからき、騎士様には」

“ゴンツッ”

話している途中に体が浮くほどの力で顔を蹴られた少女は、舌を噛んだのか、口から血を流しながら助けを求めはじめた。

「た、たすけてください。おねがい、たすけて」

《ああこれ以上見てらんねえや》

「誰も助けしてくれる奴なんかいねえよ。誰が魔人なんか助けるかよ」

「んー、それがいるみたいなんだよな」

そう言つて、人垣を掻き分け出ていくと、周りにいた人間という人間が、驚きのあまり固まった。

まさに此処だけ、この世界から切り離されたような静けさに包まれたのだ。

《そんなに驚くことなのか？ま、俺には関係ないか。俺はやりたい事をやるだけだ》

「まあなんだ、ひとまず消えろ」

そう言つて、一番近くにいた奴の首に手刀をいれ、気絶したそいつをそのまま掴んで、三人の内一番遠くにいる奴に投げ付けた。

ちゃんとスナツプを効かせてあるので、クルクル回転しながら飛んでいった。

そして、それを呆然と見ていた最後の一人に近づき、正面から顎をおもいつきり殴り、吹っ飛ばして気絶させた。

最後に某然とこちらを見ていた少女を脇に抱え込み、こちらも呆然としている人垣の間を抜け裏路地へ入つていった。

人々が正気に戻り、騒ぎだす前にこの場所を離れるのだ。

あれから俺は15分程走りつづけ、今は違う大通りからのびる細い通りに身を潜めている。

「はあはあはあ」

裏から、途中から一緒に走っていた少女の荒い息遣いが聞こえる。そろそろ息がととのったかな。

「大丈夫か？結構走っちゃったからな」

いつの間にかマントを体に巻き、フードをかぶっていた少女に尋ねた。

すると、恐る恐るいった感じでこちらを向いた。

フードをかぶっているため、顔はよく分からない。

「あ、あのっ。さ、先程、は、ありが、とう、ございました」

そういつて頭を下げてきた。

一体この子は何をしたのだろうか？

あまり聞かない方が良くもしれないが、好奇心に負けた。

《さっきから好奇心強すぎる。ちょっとは自制しなくては》

「いやいや、そんな事気にしないで良いよ。それより、さっきは何であんな事になってたの？途中からしか見てなくてさ」

そういつた瞬間少女は固まり、こちらを見る目の中に、恐怖が映った。

《あ、やっぱりまずかったか》

すると少女は少しかすれた声で話しはじめた。

「私は……、私は魔人です。さっきは間違つて、証をさらけ出して

しまったので、あそこまで引きずり出されてしまったんです」

そういつて俯いてしまった。

《は？魔人？証？なんだそりゃ。全く意味が分からん。電波さんかとも思ったけど、ふざけてなさそうだし……。んー》

「あのさ、その魔人って何？証って？」

「えっ……………」

本日何度目だか分からない沈黙。

《この話しは、ここらの一般常識か？》

そう思いながら、少女の顔のまえで手を振ってみたりしていると、やっと復活したらしく。

「魔人を知らないんですか！！」

「ああ、ここらの人間じゃ無いからな」

「そういう問題ではないでしょう！何処の世界に、魔人を知らない人がいるんですか」

《魔人という単語が一般常識か。俺の常識がそのまま通らない可能性もあるな》

「………」

適当にふざけておいた。

「はあ〜」

すると少女は溜息をつき、こちらをじつと睨みはじめた。

「あーいや、言いたく無いなら無理しなくても良いんだけど……………」

ジーー。

「あっその、だから……………」

ジーー！

「うっ」

「は〜、助けをいただいたのに言わないままでは失礼ですね」

すると頭にかぶっていたフードに手を伸ばし、ゆっくりと外した。

そのとき手が震えていたのを見た俺は、何か声をかけようかと思っ
たが、フードの下から出てきたものをみて言葉を失った。

そこにあったのは、

「……………耳？」

もちろん只の耳ではない。

「そうです。魔人とは、魔獣の特徴を持った人間のことを蔑み、軽
蔑するための差別語です。そして証とは、その特徴です。私でいえ
ば、この耳です」

頭の上に二つ、少し先の尖った毛の固まりがあったのだ。

「いくら魔人という差別語が無いところから来たとしても、こういう特徴を持った人々の受ける仕打ちを知らないって訳ではないですよっ?」

時たまピクピク動くそれは、所謂獣耳と言われるものだった。

「どう?あそこまでして助けたのが、魔人だったと分かって。後悔した?」

少し自虐的に、そして悲しそうに話し掛けてきたが、生憎俺の耳には届かない。

それは、

「かつ」

「か?」

「可愛い」

「……………ふえ?」

見とれていたからだ。

ま、そんな事はどうでもいい。

目の前の少女が、可愛いという事実があれば。

髪は淡い金色で、長さは腰くらいまであり、肌はあまり日に当たってないのか真っ白だ。

真っ白といっても病弱な感じは無く、清楚な感じが漂っている。

顔立ちは大きな金色の目と相成って、綺麗というよりはかわいらしいという表現が似合いそうだ。
そこに獣耳だ。

髪が金髪なので、何となく子狐みたいだ。

「え、いや可愛いって言ったんだ。獣耳なんて始めて見たもんでさ」

「え、あ、怖がらないんですか？」

「何処に怖がる要素があるんだ？」

「しっぽがついていてもですか？」

何処からどう出したのか、マントから金色のふさふさなしっぽが出てきた。

「おー！しっぽまであるとは！ヤバイ、ヤバすぎるぞ！本格的だ！」

少女はそれを聞いてどう思ったのか、急に黙り込み、嗚咽を漏らしはじめた。

それを見た空矢はやっと冷静に戻った。

「な、何で泣いてるんだ？俺、なんかやつちまったのか？」

空矢は顔立ちは悪くないが、小さい頃から祖父に古武術を教わっていたためか、周りにいた女子達は、近づきがたい雰囲気を感じて遠慮していたのだ。

そのため女友達は殆どいなかった。

そのため、目の前で泣いている少女になんと声をかければ良いのか分からないのだ。

「ああー。どうすりゃ良いんだよ。お、おい。大丈夫か？俺が悪かったんなら謝るからさ。泣きやもうぜ。なっ、なっ」

「い、いえ。今までそんな事言ってくれた人がいなかったの………。みんな怖がって逃げたり………」

「そ、そうか」

泣いてしまったのが、自分のせいではないと分かり、少し安心してそういった。

「あのっ、もしよければ私の話し聞いてもらえませんか？」

そういつてこちらを不安そうに見つめて来た。

《う、可愛い。何だろう。このまま放っておくのも何だし、行くところも無いし、いいかな》

そう思つて、

「俺でいいならよろこんで」

そう言つと、安心した表情で、笑つてきた。

「それなら、この近くに私の家があるので、そこで話しませんか？」

「うん、それでいいよ」

「じゃあ行きましょ」

そういつて、上機嫌な少女はフードをかぶり直し、今にもスキップしだしそんな歩調で、通りへ駆け出して行った。

「こっちですよ」

これ以上考え事をしていると、置いていかれそうだ。

「分かった分かった」

そういいながら、空矢は通りへ歩いて行った。

第四話 情勢と実情

先ほどまで居た通りからさらに10分ほど歩いた所に、その小さな家はあった。

活気付いていてにやかだった通りと比べ、此処は静かな所で、閑静な雰囲気が漂っていた。

中に入ってみると、そこは清潔に保たれていて、居心地が良さそうだ。

《全くどうでもいいことだけど、家にはいる時は靴脱がないんだな。本当に日本でいう中世ヨーロッパみたいなところだな》

そんなことを考えながら家の中を見回していると少女が、

「あ、その椅子に座って待っててください。今飲み物を持ってきますね」

「わかった。あまり気を使わなくていいぞ」

「いえ、命を助けて頂いたのですから当然ですよ！むしろ足りないくらいです！」

「そ、そうか」

《そんな危ないところだったのか？本当此処はどこなんだろう？変な人だと思われるの覚悟でこの少女に聞いてみるか》

そう思いながら椅子に腰掛けると、

《あ、そう言えば自己介すらしてなかったや。成り行きでこうなったから忘れてた》

「そう言えば俺たち、自己紹介してなかったな」

机の上に、茶色がかった飲み物をおいている少女にそう言ってみると、

「あつ！す、すいません、私としたことが。私はエリーシャっています。父は商人で、母は平民でした。今14歳です」

続けて名前を言おうと思ってたのに、先をこされてしまった。

「そうかエリーシャか、よろしくな。14歳なのにしっかりしてるな。俺は羽白空矢って言う。19歳だ」

その飲み物は飲んでみると、とても爽やかな味がした。

《なかなかいけるな。フルーツティーか？レモン、いや、酸味の強いアップルティーか。なかなか病みつきになる味だな》

そうやって紅茶らしき飲み物を味わっていると、

「ハシロクウヤ？ずいぶんと長い名前ですね。それに聞き慣れない名前」

じつと何かを考えていた少女、エリーシャに、めっちゃくちゃなイントネーションで名前を呼ばれた。

しかも勘違いされている。

「そうか、此処には余りこう言う名前はないのか。ちなみに名前は空矢だ。羽白は苗字だ。家名というやつだ」

「えっ、てことはあなたは貴族なんですか!」

《此処には貴族までいるのか。さっき平民って言葉も使ってたしな》

「いやそんな大層なものではない。俺のいた所では、全員苗字を持つてるぞ」

「そうなんですか」

「あとさっきから気になってたんだが、俺に丁寧語を使う必要は無いぞ。堅苦しいのは出来なくも無いが、煩わしく感じてな」

「わ、わかりました。できればそうします」

「それじゃ本題に入ろう」

「はい」

「君の話を書くことがメインなんだけど、その前にいくつか聞きたいことがあるんだ。それでもいいかな?」

「はい、私で答えられることでしたらなんでも聞いてください!」

「そうか、じゃあ遠慮なく。変なこと聞かもしれないけれど、まずこの世界の地理的なことと、世界情勢が聞きたいんだ。何故こんなことを聞くのかは、後で説明するよ」

「はあ……。それじゃあ私ができる範囲で答えてますね。まず地理的な事ですが、この大陸はクラリス大陸と言われています。もう一つ大陸があるそうなんですが、そちらの情報はほとんど無いです。ただ少しわかっている事と言えば、あちらにも人々が生活していていくつもの国があると言ってます。」

「何でその大陸の事がわからないんだ？」

「本当に変な事を聞くんですね。いまの技術では、彼方まで渡っていけるほどの船が造れないんですよ。たまに奇跡的に渡ってくる人は、ポロポロで死にそうになって来るんですよ。そういう人がいるから、辛うじて大陸があつて、人が住んでいる事が分かったんです。」

「ふむふむ」

「次はこの国の事ですが、名前をオルタリア公国と言います。すぐ南に隣接するレイファス王国の衛星国的な国ですね。あと東にあるカーチス公国も同じくレイファス王国の衛星国ですね。」

「ほお。てことはレイファス王国ってのは随分大きな国なんだな。」

「そうです。その他にもルーマス共和国とリーン帝国という大国があり、中央のランバル連合という小国の集まった集団を挟んで三竦みの状態になってます。今は平和ですが、いつ戦争が起こるかわからない状況です」

「そうか。それじゃあ今は大きな戦争はないんだな」

「そうですね。国境付近で小競り合いがあつたという話は聞いた事はありませんが」

「そうか」

「あとはどんな事が知りたいですか？それでも私、知識量は結構自信あるんですよ！」

「そうか。それなら魔人について教えてくれ。どんな扱いを受けるかもな。言いたく無いなら遠慮なく言ってくれ、自分の事だからな。無理はして欲しくない」

「いえ、心配してくれてありがとうございます。でも大丈夫です。慣れていきますから」

「そうか」

「魔人とは、さっきも言いましたが、魔獣の特徴を体の一部に持つ人間の事です。特徴の事は証と言はれ、私は耳とっぽで二箇所あります。他には手に鱗が生えていたり、羽が生えていたり色々です。そしてもう一つ、人間と魔人の違う所は、魔力の保有量です。証の魔獣のランク順に、高い方が多いです。それでも最低ランクの魔獣の証を持つ魔人でも、常人の数倍から数十倍の量を保有していますけどね」

「へえ〜。エリーシャの証はどの位なの？」

「それがわからないんです。今まで確認されていない種類らしくて魔力量は結構あるみたいなので、そんなに低くは無いですと思うんですけど」

「そうか。そう言えば、魔力があるって言ってたな。てことは魔法

があるのか？」

「はい、ありますよ。魔法ではなく魔術ですけど」

「おお」

「あの、そろそろ聞いていいですか？何故こんなに一般常識ばかり聞くのか」

「ああ、そうだったな。変なやつだと思はれるかもしれないが、本当の事をいっぞ。どうやら俺は、異世界からきたらしい」

なんでも無いかの様に俺が言うと、エリーシャはよく理解できなかったのか、こちらをじっと見て来た。

・・・凝視。

・・・無言。

・・・凝視。

・・・沈黙。

・・・凝視。

「あー、えーと、何だその、何かをすごく言いたいけど言い出せなくて困ってるてきな顔は」

「いえ、クウヤさんが変な事言い出したから」

お、いつの間にか敬語がとれてる。
しかもなんだか名前で呼ばれてるし。

「いやー、俺もそう思ってるんだけど、今まで聞いた話からするとおれの元いた所と全然違うようですよ。じゃあ試しに聞いてみるけど、日本って知ってる？俺のいた国なんだけど。何ならアメリカとか中国とかロシアでもいいけど」

《今更だが俺落ち着いてるな。まあ心残りって言うのも無いからかもしれないがな》

「そんな国名は聞いた事が無いですけど」

「だよな。第一俺のいた世界では、魔法、いや魔術だけ？まあそんなもの無かったしな」

「え！そんな世界全く想像できません」

“ピクッ”

あ、耳がたった。

それを見て和んでから、裏付けも取れた事だし話をもどす事にした。

「まあそういう事だから、此処の常識が通じない事があるかもしれないが、それは勘弁してくれ。それじゃあ君の話の聞こえか。余計な話しちまったからな」

笑ながらそう言うと、

「あ、すっかり忘れていました！なんだか今の雰囲気と言うような話では無いですけど」

「どんな話でも構わないよ。聞くなって約束したしね」

そう言うと安心したように微笑んだ。

「それじゃあまずもう呼んでしまってますけど、クウヤさんって呼んでいいですか？私の事はエリーでいいですから。仲の良い人はみなみんなそう呼ぶんです。と言ってもそんなにはいませんでした」

「ああ、いいよいいよ！エリーだな！よろしく！」

少し暗くなってしまったエリーを元氣付けるためにも、明るく返事をしようと思っただら、焦ったあまり、少しどもってしまった。

「ありがとうございます！」

こんな事でこんなに喜んでくれるとは。

それにしてもエリーは可愛い。

笑っているのを見ると、つい“ドキッ”としてしまう。

「それじゃあまず魔人の境遇について話したいとおもいます。魔人はさっきも言った通り、魔獣の特徴を持っているので、基本は魔獣と同じ扱いを受けます。ひどい時は生まれてすぐに殺されてしまいます。いえ、その方が幸せかもしれませんが。殺され無かった場合は人買いに売られ、労働奴隷になるか、綺麗だったなら貴族の慰みモノにされます。その分私は幸せでした」

エリーは何かを思い出しているのか、少し目を赤くさせながらそう言った。

しかし直ぐに気を取り直し、また話し始めた。

「父は商人だったので、魔人を見慣れていました。その為、私を産んで取り乱していた母をなだめ、魔人も人間と変わらないと説得し、私を隠して育ててくれました。今私のもっている知識は、父が教えてくれたものがほとんどです。私の正体がばれてしまうと大変なので、商売をしながら各地を転々としていました。それでもその間私はとても幸せでした。父も母も私を愛してくれていましたから」

エリーは涙をこぼしながら、俺の眼を真っ直ぐ見てそういった。

《本当に幸せだったんだな。一体何があったんだろう》

「しかしもうその愛を感じる事ができないんです。父と母はもういないから」

泣きながら語るその小さな姿を慰めてやりたかったが、俺はかける言葉がみつからなかった。

これ程もどかしく思ったのは初めてだ。

そう思っている間にも、エリーはどうか声をしぼり出して話しを続けていた。

「あれは丁度一ヶ月位前の事です。この街に来る前に暮らしていた所で、私の事がばれてしまったんです。父は私と母を逃がす為に時間を稼いでくれました。その間に私と母は荷物をまとめ、荷馬車を用意しました。帰って来た父を乗せ、この街まで逃げてきました。これでまた平和に暮らせると思ったのもつかの間、父が倒れたんです。時間を稼いでいた時にやられたのか、体の中で血が漏れていたそうです。そしてすぐに死んでしまいました。その時の私の記憶はほとんどありません。後から母から聞いたら、自分をせめて自暴自

棄になっていたそうです。そして悲劇はまだ続きました。働き手がいなくなってしまうた代わりに、生活費を稼いでいた母が倒れてしまったんです。そして母も父の死にまいっていたのか、直ぐに父の後を追いました。私はもうどうなってもいいと思って外をうろついています。そして案の定、証を見られて人々の前に引きずり出されてしまいました。これで父と母の後を終えるとおもいましたが、実際に死を目の前にしてみると、怖くなって命乞いをしていました。そこにあなたが現れたんです」

そう言っただけは力強い眼をこちらに向けてきた。

「最初にも同じような事を言いましたが、魔人は家畜と同じような扱いを受けてます。それを民衆から助けてくれた。その時はとても嬉しかったです。それに証を見ても怖がらなくて、か、可愛いと言ってくれた。その時に私は、この人に話を聞いてもらいたいと思っただんです。迷惑かとも思っただんですが、どうしても聞いてもらいたかったんです。今にもパンクしそうだったんです。迷惑でしたか？」

そんな背景があったのか。

「そんな事はない。俺で良ければ幾らでも聞いてやるさ」

「ほ、本当ですか？迷惑じゃ無いですか？うざく無いですか？」

「おいおいそんなに卑屈にならなくても」

「うっ、ひっく」

するとエリーは、今まで溜めていたものを全て出し切るかのように泣き始めた。

「ほら、よしよし」

俺はエリーの横まで移動し、落ち着くまで頭を撫でてやることにした。

それからしばらく、泣き声は止む事が無かった。数分後泣き止んだエリーは、

「みつともない所を見せてしまいました。……えへへ」

エリーは、思いっきり泣いた事で、付き物が落ちたような、すっきりの顔になっていた。

「あの、クウヤさんはこれからどうするんですか？本当に異世界と言う所からきたとしたら、行くあても無いですよね」

《ん、いたいところに来てきたな。

今まで考えないようにしていたのに。

まあいつかは対面する話だけだね。》

「まあなんだ、あんま心配してないけどな。両親もいたけど暫くあってなかったから、まだあっちに帰ん無くてもいいし、この世界は面白そうだし。多分帰る方法を探しながら、旅して回る事になるかな」

「そうですか」

何か言いたそうな顔をしているな。

「あのー！」

「ん？」

「その、あの、えーと、だから」

「言いたい事は遠慮無く言え。溜め込んでるとよく無いぞ」

「それじゃあ、私も連れて行って下さい。お願いします。やっぱり地理を知っている人がいた方が良いでしょうし、私、家事とか料理とかできますよ。それに、それにもう此処にはいられないですし」

何か凄い力説して来る。

ん？もういられない？

「もういられないって言うのは？この町に住めないって事か？」

「はい、そうです。さっきの件もありますので、ずっと注意深く過ごしてましたからこの家はまだ知られてないと思いますが、いつかはばれてしまうとおもいます。見つかったら殺されてしまうのは目に見えているので」

「何で魔人と仲良くしないのかね？人間は」

「あれ？言ってますでしたか？この大陸にはアスター教と言う宗教があつて、その信者が九割を占めているんです。そこが魔人を差別してるんです。詳しくわかりませんが、何でも『魔人は昔魔獣と交わった忌むべきもの達の末裔で、人間とは認められない。』とか何とか。証を見る限り、あながち間違つてはいないのかも知れませんが、中は他の人間と同じなんですから、そんな小さな事、気にしなればいいのに」

途中から、我が事のように熱を入れて話していた。
いや、自分の事だったか。

「おれのいた世界にも宗教があつたけど、どこも同じだな。これはあくまで一例だけど、敵という存在があると、信者達をまとめやすいんだよ」

「私達は魔人になりたくて生まれた訳じゃないのに」

「今まで誰もそれに反抗しなかったのか？魔人どうして集まったりとか」

「聞いた話だと、魔人を擁護する方達がレジスタンスを作っているらしいですよ。反教会勢力って普通の人は読んでます。でもまだ小さいからか、たいした行動に出てはいませんが」

「ん？どこかで聞いたような？」

「それよりそんな事を話していたんじゃないやありません。私も連れてつてくれるのかという話をしてたんです。さあ、答えて下さい。ダメと言つてもついてきますけどね」

「おいおい」

「一人は嫌なんです」

《ギャー！》

そんな下向いて悲しげな雰囲気醸し出すのやめて。
だ、ダメだ。

俺にはこれに対抗する手段がない》

「仕方ない。ついて来ても良いよ」

そう言っつてやると嬉しさのあまりか、抱きついて来た。

前にも言ったかもしれないが、俺は女友達がいなかった為、こういう事に免疫が無かった。どうしたらいいのかわからなくなってしま
うのだ。

《ギャー！》

こうして俺はエリーに生気を吸い取られてしまった。

俺にその後の記憶はない。

第五話 回想から現実へ

私はその時世界に絶望していたんだと思う。

愛する父と母を同時期に失ったにも関わらず、神様は助けてくれなかった。

私はただ静かに、他の人と同じように暮らしたかっただけなのに。

魔人は幸せになってはいけないのだろうか。

魔人の何がいけないの？

見た目に魔獣の一部を持っているから怖いと思つのも頷ける。

でも中身は普通の人間と変わらない。

お腹は空くし、眠くもなるし、嬉しい時も悲しい時もある。

誰かを愛する時もあるし、愛されたいとも思う時もある。

大切なものも有るし、守りたいものも有る。

でもそれを分かってはくれない。

みんな私を見ると、悲鳴を上げて逃げて行く。

仲良くしていた子も、私の証を一目見ると顔を恐怖に歪め、悲鳴を上げて逃げていった。

あの時は父と母が慰めてくれた。

一晩中一緒に居てくれて、耳元でこう言ってくれた。

『いつかエリーの事を、心から受け入れてくれる人に出会はずだ。それまでの辛抱だ。』

『私達も応援するからね！可愛い娘の為ですもん！』

あの時は疲れて寝てしまうまで、両親の手の中で泣いてしまった。

世界の何処かには、魔人という事を抜きにして私を見てくれる人に会えると思えた。

しかしそうは甘く無かった。

いろいろな所を両親と点々とした。

それでも出会う事ができなかった。

最初がいい。

証を隠している間は普通に接してくれる。

何度かは告白された事もあったが、その度悩んで秘密を明かすと近寄るなど罵倒された。

そんな事があってからはより人間不信となり、とうとう家からも出なくなってしまうた。

しかし父の具合が悪くなり、死んでしまうとそう言ってられなくなってしまうた。

私は母が働いている合間に買い物などの簡単な事を手伝い始めた。

少しずつ外に出る事にも慣れて来た矢先、父の後を追ひ、母までもが死んでしまった。

私には隠して居たようだが、やはり父の死が堪えて居たようだ。

頼る人がいなくなった私は自暴自棄になっていた。

そんな時彼に会ったのだ。

死をただ待つだけだったを私を助けてくれ、魔人という事を恐れもしなかった。

そして彼は私に可愛いと言ってくれた。

この耳としっぽを見た人の中で、そんな事を言ってくれた人なんていなかった。

そしてその言葉を聞いた時、私の中で何かが生まれたのが分かった。

この人について行きたい、そういう思いでいっぱいになったのだ。

こんな気持ちは初めてだったので最初は戸惑った。

しかしこんな出会いはもう無いかもしれない。

そう思った私は彼に気持ちを伝える事にした。

彼はさっき抱きついたら気絶してしまって、まだ起きていな。

起きるまでは顔を見て待つ事にしよう。

早く起きないかな？。

でもこの顔もずっと見てたいな？。

そんな事を考えていると自然と笑みが浮かんで来る。

そして少女は見つめている相手が起きるまで、その場を動こうとはしなかった。

「そついや今何時だ？」

「今は正午を少しすぎた位です」

「そうか。あんまり時間は過ぎてないんだな。てか、時間の概念はあつちと同じか。これからどうするかな。準備しないと、旅に出ようも無いからな。まずは金の工面か？」

傍らでモジモジしていたエリーが声をかけてきた。

「あ、あのー！」

「ん？どうかしたか？」

「あ、うう。ええと、その。会ったばかりでこんな事言つのも変、かも、しれま、せんがぁ」

最後は段々と尻窄みになってしまっている。

「ん？どうした？」

一声かけた瞬間、“ガバツ”と体を乗り出し、俺の目を見ながらこつ言つた。

「一目惚れしました！そ、その、変かと思われるかもしれませんがなんて言うか、ズキーンとしてしまったと言うか、グツと来たと言うか、あわわわわー！」

途中から擬音語ばかりで何が言いたいのか分からなかったが、何だ

かすつきりしたような顔しているエリー。

「ええと、今何て言ったんだ？ごめん、早口で良く聞こえなかった」
初めての告白らしき話にどうしたら良いのかもわからず、一応聞き間違っていないかを聞き直して見る事にした。

今度は言い切つてスッキリしたのか、先程よりも幾分かスムーズに、
「一目惚れしたって言ったんです！私、クウヤさんに一生ついてきます！」

俺はと言うとテンパリを超えて、フリーズしていた。
何も言わない俺を見て何を勘違いしたのか、

「あ、やっぱり迷惑でしたか？すいません、私、すこし自分を忘れてしまったみたいです。あ、今の言葉忘れて下さい」

少し辛そうな顔を健気にも隠そうとしながら、そんな事を言われた。
と言つても忘れられるわけがない。

「いや、黙っていたのはそんな理由じゃ無くてだな、なんと言うか、
恥ずかしながら、告られるのが初めてで、どう対応すればいいのか
分からなかったんだ」

冷静に返事を返している様に見える外の俺。
しかし内側では、

《な、なんて言えばいいんだ！今の対応でよかったのか？変な事言
つてエリーを傷つけられない。てかエリーは本心から言ってくれて
るのか？ドッキリなんて事無いよな。てかこっちにはドッキリって

あるのか？》

意味の分からない事でいっぱいになっていた。

「そ、それじゃあ付き合ってくださいか！」

「あ、ああ。俺なんかで良ければ」

空矢の心中がおかしくなっているうちに、話はまとまっていた。

《あ、なんか結果凄い事になってる。初めての彼女誕生。てか歳やばくね。俺は正常だからな。うん、正常だ。ただなんか頑張ってる感じが湧き出ているエリーを可愛いと思うのは確かだ。ま、可愛いから良いか。エリーも俺なんか好きになって物好きだな。》

自分の容姿が結構整っている事をよく分かっていない空矢。

「や、やりました。良いつて言ってもらえました。ダメって言われなくてよかった。嫌われなかった。嬉しい！フッフッフ」

そこでひとまずは話を変えるべく、何か横でゴニョゴニョ言ってるエリーに声をかけた。

「ま、まあその話はおいといてだな、お金の話なんだが」

《ひとまずこの話から逃げよう。明らかに現実逃避だな。何時かは向き合わなければいけないが、それはその時考えるようにしよう》

「心配しないで下さい。それなら大丈夫です」

躲された。

すごいニヤニヤしながら。

それからはとても気まずい時間が過ぎて行った。
話を振っても永續きがせず途切れてしまう。
そうこうしているうちに外も暗くなってきた。

「もう暗いので、そろそろ寝ましょうか」

「そ、そうか。じゃあ寝るか」

「その部屋を使って下さい。ベッド、綺麗になっていますから」

「じゃあありがたく使わせてもらおう。また明日な」

そう言って俺は、逃げるようにその部屋に入ってしまった。

「はい、また明日」

第七話 逃亡と旅立ち

「ん〜、まだ日は登っていないな。いろいろとあった割にはいつも通り起きたな」

ついそんな独り言を言いながら、ベッド（ベッドと言っても、木の箱みたいなのに布をかけて、さらにその上から掛け布団をかけただけのものだ）から出た。

《あー、昨日の事もあって凄く顔が合わせづらい》

そう思っただけで部屋の中を行ったり来たりしていると、外から人の気配を感じた。

《エリーはもう起きているらしいな。てか早く無いか？多分今5時位だぞ。こっちはこれが普通なのか？寝るのも早かったしな。気持ちの整理もついてないが、何時までもこうしていられ無いし、体も動かしたいしな。よし！》

体に入力を入れ直し、扉を開け放った。

「あ、クウヤさん。おはようございます。いい天気ですよ！」

雲一つ無い薄暗い空を背景に、朝の挨拶をしてきた。

どうも家にいる時は耳を頭巾で隠しているらしい。ちなみにしっぽは服の中だ。

「ああ、おはよう。エリーは朝早いんだな。これが普通なのか？こ

「うちの世界ではと言う事だが」

エリーはすこし考える様に首を傾げた。

これが凄く絵になっていて可愛い。

「多分私は早い方ですよ。母の手伝いをしていた時からの習慣です。それに父が商人でしたから、朝が早いんです。買い付けとかも早朝です。なので自然と早くなって行っただけです。それでも普通の方は6時頃には起きていますよ」

何か物凄くニコニコしながら返事を返してきた。

「こっちはさっきまでどう対応すれば良いのかで悩んでいたのに。」

「そうか。で、聞きたいんだが、この家に庭とかはあるか？誰も来ない様な広場でも良いよ。すこし体を動かしたいんだ」

「私達の様な市民の家には庭はありませんよ。うちも結構裕福な方だったんですが、この家を持つのが精一杯でした。広場も中央にいかなければありませんね。人もいると思います」

「そうか、次の機会に持ち越したな」

「あの、体を動かすって何をやるんですか？助けてくれた時にもとても強かったですし、剣士さんだったんですか？」

「ん〜なんて言うのか。剣じゃ無くして拳を使う拳士だな、俺の場合うちの爺ちゃんが古武術の師範だったんだよ。と言っても半ば廃れかけた道場で、弟子は俺と数人しかいなかったけどな」

「うんと、コブジュツ？と言うのがよく分かりませんが、それを習

得していたから強かったんですね！」

凄く目を輝かせたエリーがこちらを見上げてきた。

「まあそうなる。こっちと違ってあつちには平和な所だったから、実戦なんて無かったけどな。せいぜいやくざの組を、爺ちゃんと潰しに行った時くらいか？本格的に暴れたのは」

「それにしても慣れてましたね」

「まあ雰囲気は分かってたからな。そうだ、実戦と言えばこの世界には獣とかいるのか？街道で襲つて来るような凶暴なやつとか。前言つてた魔獣がそれに当たるのか？」

向こうの世界の異世界観と照らし合わせて聞いてみた。

「そうです。おとなしい獣もいますが、凶暴で人間を襲つたりする獣のことを、魔獣と総称して言ってます。その事ですか？」

「そうだ。俺の世界には獣はいたが、積極的に人とかを襲うのはいなかったからな。教えてくれ。あとギルドとか傭兵とか冒険者のなものもいたら教えてくれ」

ギルドがあつたら登録しておくに越したことはない。

「余り良く知ってるわけでは無いんですけど、頑張つて説明します！まずは魔獣ですが、街の外に出ても必ず出会うわけではありません。今は街道などがあるので、そこを通ってる限り出会うことはまずありません。それぞれの国が騎士団を派遣したり、傭兵に依頼を出したりして対処しています。それでもたまには遭遇してしまいま

すけど、それよりも人間の盗賊団のほうが悪質ですね。相手が人間なので、巧みに討伐隊をかわしたり、罠とかを使って返り討ちにしたりするそうなので、国も対処に困っているそうです。そしてギルドですけど、ほとんどの場合傭兵ギルドのことをさします。そこには世界のほとんどの傭兵たちが登録していて、単純に強い順にランク付けされてるそうです。詳しい仕組みは知りませんが。冒険者と言うのはちょっと分からないです」

イメージ通りのギルドだった。

「そうか。一応登録しておくかな。金も稼げるだろうし。」

「あ、お金の話なんですけど、私はもうここにはいられ無いのでこの家売って、あと父と母の残してくれたお金を合わせれば、結構な額になるとおもいます」

「でもそれはエリーのお金だろ。それを頼りにするのはちょっと悪い気がするな」

「いえいえ、遠慮しないで下さい。わ、私達の関係じゃ無いですか」

《おいおいエリーさんよ。そんなはにかみながら言うなんて反則だろ！》

「あ、ああ。じゃあ今日は家の買い手を探してギルドに登録しにくいかな。それから必要なものを買ってこよう。なにはともあれ朝飯だ。手伝おう」

「はい。お願いしますね！」

それから二人はちよつと早めの朝食をとつて、街に繰り出す事にした。

「そう言えばさ、あんな事があつて外出ても大丈夫なのか？顔を見られてない？」

家を出てしばらく歩き、賑やかな大通りにさしかつた頃に、横で歩いているエリーにふと思つた疑問を提示してみた。

本来ならもつと早くに気付かなくてはいけない事だつた。

自分では大丈夫だと思つていても、何処かしらで混乱していたのかもしれないな。

横を見ると、今エリーはマントを羽織り、フードをかぶっている。

「今までここに移り住んでから、外出の際にはフードをかぶつていたので大丈夫だと思ひます。私の場合、服で隠れる所に証がある訳では無いんで、少し苦労しますが」

「ふむふむ、てことは服に隠れるところに証がある人もいるんだ」

「はい。私が知つてる方でしたら、体が鱗で覆われている方がいます。その人は首の下までしか覆われていなかったんで、特に特定の何かで隠さずに、外を歩いてましたよ」

そんな話をしながら歩いていると、目の前に木造の大きな建物が建つていた。

エリーは話しながらも、ちゃんと行き先に向かつていたらしい。

「ここが噂のギルド支店か」

「噂はありませんけどね！」

上手く乗ってくれたエリーを後目に、前のギルドを見た。エリーの話によると、これはこの街の支店なのだそうだ。大概の大きな街には有るらしい。なんと大きな組織だ事か。家を出てから話し合った結果、まずここに来ることになった結果、ここに来た。

「よし、それじゃあ入ろう」

気分を引き締める意味合いも兼ねて、一言言つと、扉に手をかけ、一思いに開けた。

先ず見てわかつたのは、中は大きなホールになっており、突き当たりが受付の様になっている事だ。

右手には階段があり、二階に続いている。

「私も初めてなのでよく分からないですが、多分受付まで行けば何分かるはずです。行きましょう!」

エリーの言つとおり受付まで行くと、そこに座っていた女の人が尋ねて来た。

「今日は何の御用でしょうか?」

ここへは登録のために来たので、本来の目的を片付ける事にする。

「ギルドに登録したいんですが、出来ますか?」

「新規の方ですね。はい、出来ますよ。それではこの用紙に書いて

あるとおり、記入お願いします」

《ん、しまった。字が読めん》

「エリー、代わりに書いてくれ。名前はクウヤ ハシロで良いから
ひとまずエリーに書いてもらうことにした。

《ん？字は読めないのに何で言葉は話せて通じるんだ？まあ通じないよりは良いけどさ》

そんな疑問が鎌首をもたげたが、今は目の前のことに集中する。
書く事はあまり多くなかったのか（と言うよりかけない事が多かったのかもしれない）、すぐに書き終わった。

「はい、確かに承りました。少々お待ち下さい」

そう言っただけの人は裏に引っ込んで行った。

「これで登録は出来たな。やっぱりランク付けとかあんのかな？」

「さあ、私は詳しく無いので良くわかりません。すいません」

「いやいや、責めてないって。聞けば分かるさ、なっ！」

急に落ち込んでしまったエリーを必死に慰めていると、裏からあの
女の人が帰ってきた。

「お待たせしました。これが傭兵ギルドのメンバー証です」

そう言って白色のカードを渡された。

《これが会員証か。以外と重いな。金属で出来てるのか?》

「では、説明に入らせていただきます。今回は新規の登録なので、はじめから説明して行きたいと思えます。始めにメンバー証についてですが、身分証の代わりにも使える物です。なので、悪用される可能性もあるため、無くさないように気をつけてください。そしてギルド会館の事です。大きな町でしたらどこにでもあります。そこでは依頼を受けることが出来ます。国の首都でしたら、国からの依頼もたまに出ることもあります。次にランク付けの事です。ギルドでは強さによって順位、ランクを決めています。ランクはカードの色で見分けます。上から金、銀、銅、黒、青、赤、緑、白です。ランクを上げるには自分よりも高いランクの人に挑み、勝つ事が、ギルドの審査員と戦って勝つ事で上がります。その際、ギルドの審判の元で戦って下さい。個人同士の戦いでは、両方同意していてもランクに反映はされませんのでご了承ください。裏取引などの防止のためです。あとギルド内にいるときに挑戦を挑まれましたら、それも断る事が出来ませんのでご了承ください。以上で大まかな説明は終わりです。何か質問はありますか?」

「だいたいは分かった。」

「一つ気になる事を聞いてみよう。」

「今現状で金は何人いるんですか?あと一番人が多いランクは?」

「現在ランクが金の方は五人おります。人が多いランクは黒です。銅と黒の壁が高いそうですね。」

「そうですね。有難うございました。」

「早速ギルドの審査員と戦いますか？」

《ん、この町からは早く離れるに越した事は無いからな。次の機会にするか》

「いや、良いです」

「そうですか。それではお気をつけてお帰り下さい」

「ありがとうございます」

「よっし。次行こう」

「そうですね。次は家を売ってしまおうと思います」

「そうか。それじゃあさっさと終わらしてしまおう」

すこし暗くなったエリーの顔色をみて、なるべく陽気に返事をした。

「はい！」

そう良いながら賑やかな大通りへと二人は出て行った。

先ず、ギルドから出た俺たちはそのまま役所に向かった。

どうも不動産屋みたいなものはこちらには無く、国が全て請け負ってららしい。

換金は直ぐに済み、線が三本書かれた銀貨を三枚と二本書かれた銀貨を二枚、そして一本書かれた銀貨を六枚渡された。

「あ、貨幣価値について聞くの忘れてた。今のでどの位になるの？」

「ええとですね、貨幣には四種類ありまして、安い順に銅貨、銀貨、金貨、白金貨です。でも白金貨は王族か貴族、もしくは裕福な商人位しか見る事が出来ません。金貨も引越しなどの事情が無ければ庶民は見る事ありませんね。私は父の商売が上手く行つてた頃に見た事があります。家から持ち出して来たこの袋にも、何枚か入つてますよ」

そう言つて家から持つてきた、俺の腰に吊り下がつてゐる革製の袋を指差した。

《どつりで重い訳だ》

「そして銅貨千枚で銀貨一枚に、銀貨千枚で金貨一枚、金貨百枚で白金貨一枚になります。銅貨と銀貨にはそれぞれ一、十、五十、百、五百と純度の違う硬貨があり、金貨にも一、十、五十の純度の違う硬貨があります。一は線が一本、十は二本という風です。そしてだいたい一般庶民の月収が税金を考えなければ、銀貨二十枚程です。食堂で一食食べれば、銅貨百枚位です」

「なるほど。てことは今俺たちは結構な額を持つてゐる訳か。用心しないとな。まあそれはおいといて、次は食料とかをかを買わないとな」

そういう訳で俺達は市場まで来たが、俺は人数の多さに参つてしまひ、使い物にならなくなつていた。

余りにも人口密度が高いのだ。

交渉はエリーに一任し、俺は彼女を守る事に専念する事にした。

やはり商人の子だけはあつて、エリーは交渉術が上手い。

店のおじさん大丈夫だろうか？

今にも口から魂が出て来そうになっていたが。
そんな事もありながら、揉みくちやにされながらも俺達はどつにか
全てのものを買って終えた。

「はあ、結構しんどかったな。買うもの買ったし、さっさと町を出
るか」

「あ、そう言えばクウヤさんは武器はいら無いんですか？」

「ああ、前も言ったけど俺は拳が武器だからさ、そう言う特定の武
器はなくても良いんだ」

「でもやっぱり魔獣と戦う時は、何も持ってないよりはあった方が
良いと思うんです。ですから今から武器屋に行きませんか？防具も
あった方が良いと思いますし」

「ん、そうだな。解った。ひとまず武器はあっても良いと思う。
防具は俺の流派に合わないからいらないけど」

「どんな流派なんですか？」

「ええとな、素早いステップで相手を翻弄するのがうちの流派の
基本だな。流浄派じゆつじやうはつて、名前にも入っている通りだ。基本拳で戦う
が、時には相手の武器を奪って使う事も有るから、一通り全ての武
器は使える。そんなとこだ。それじゃあ行きますか」

そう言う事で、この町一番の武器屋に行く事にした。
歩くこと数分、入り口の所に剣と鎧の絵が描かれた看板のさがった
店の前まで来た。

「大きいな。二階建てか？」

「そうみたいです。ここはこの町で一番大きな武器屋だそうです。まえ傭兵の方達が言ってるのを聞きました」

中に入ってみると、目の前に剣や槍、メイス、弓など、多岐に渡る武器の数々が並んでいた。

「クウヤさんはどの武器にするんですか？」

「ん〜、剣はダメだな。習ったのは刀だから操り方が違う。メイスなんか論外だ。スピードが遅すぎる。ここは無難に槍かな。棍があれば一番なんだけどな」

「こんなのはどうで、つつ、お、重いです」

目の前にある槍の中から、柄まで鉄で出来た重厚なものを取ろうとして、余りの重さに落としそうになったエリー。

「おいおい、エリーには持つの無理だよ。これで多分全部鉄で出来てる。展示品か、それとも需要があるのかは分からんが」

「よくお分かりで。それは全て鉄で出来ております。需要はほとんどありませんけどね」

裏から急に声がかかった。

俺は少ししまえから気配を読んで知っていたが、エリーは気付かなかったようで、飛び跳ねて驚き、俺の腕に抱きついてきた。

「驚かせてしまった様ですね。私はこの店で店主をやっている者で

す。どの様な槍を御所望ですか？」

年配の店主が尋ねてきた。

「長めの物が欲しい、身長位は欲しいな。ある程度頑丈な物が欲しい」

「ありますとも。とてもいい品が。」

「それを見せてもらえるか？」

「畏まりました」

そう言って持ってきた物は、長さ一メートル八十センチ程の槍だった。

穂は諸刃の直刀になっている。

艶やかな木出来であった。

軽く振って見る。

「俺にちょうどいい重さだな。これは幾らだ？」

「こちらは品も良い物ですので、銀貨百三十枚で御座います」

すかさずエリーが口を挟み、値切る事十分。

「では銀貨八十枚でよろしいですか？」

ちよつと泣きそうな店主と得意げなエリーが出来上がった。

《てか銀貨五十枚値切ったのかよ。凄いなエリーは》

お金を払い、刃の手入れ用の砥石と布を買い足し（これもエリーはきっちり値切った。）、店を出た。

《今更だけどこの短槍は目立つな。剣が主流のこの世界で短槍だもんな、まあ本筋の拳の方ははもつと異端かもしれないが》

しばらく歩き城門に着き、横を歩いていたエリーを見やると、少し顔を陰らしていた。

《父親と母親と一緒に過ごした町だしな。感傷的になるのは当たり前か》

エリーの頭に手を乗せ、フード越しに撫でてやり、

「何時か此処に来よう」

そう言ってやるとエリーは顔を上げ、こちらをじっと見つめて来た。

「大丈夫です。私にはクウヤさんが居ますから」

《エリーは俺が元の世界に戻る可能性を考えてないのか？》

そんな事を考えながらも表情には出さないうまま、言ってやった。

「嬉しい事を言ってくれる。よし、それじゃあ気分を変えて出発だ
！」

エリーは今度こそ前を向いて、明るい顔をして城門を潜った。

《そう言えば、城の奴らに追われてたよな気がするな、俺。何で普通に城門を通れるんだろっか？まあ良いか、通れたんだし》

後日知ったのだが、国の上層部は大層馬鹿で、すでに外へ逃げたと勘違いし、騎士団を外へ派遣していたのだ。

その上、何者かによる意図的な命令系統の混乱と、犯人の容姿を把握して無い事などが更に拍車をかけ、空矢は逃げおおせる事が出来たのだった。

第八話 人の心を惑わす不思議な術

一歩外へ出ると、そこには草原が広がっていた。

「うおー、すごい綺麗なとこだな。大自然って感じがする」

「この辺りは草原が続いています。その為、放牧などが盛んですよ」

俺は大量の荷物と長槍を持ち、エリーはそれよりも少ない荷物を背負っている。

「ん〜、やっぱり馬を買った方がよかったかな。これじゃ俺でも結構きついかもしれん。それに槍嵩張る」

「でもこの辺りの馬は質が悪いですよ。どうせなら、レイファス王国かリーン帝国産の馬の方が良いです。その分値は張りますが」

「そうか。じゃあ一先ずレイファス王国に向かって旅してみるか。本来の目的の世界を渡る方法も、見つかりやすくなるもんな」

「あっ」

その言葉を聞き、エリーはハッとする様に固まった。

《もしかして、俺が元の世界に戻るかもしれない可能性を忘れてたのか？》

「その事忘れてました。もし戻る時は一緒に連れてって下さいね！」

《ぐはっ！予想外のジャブが来た。ま、まあ後で考えよう。今考え
ても返事出来なさそうだ。》

「まあその時はな」

あやふやに返事をする、その意図している事がなんとなく分かつたのか、こちらをじっと見つめて、次の瞬間、俺の腕に抱きついて来た。

エリーはごうも、抱きついてくるのが好きらしい。

「絶対ついていきますから」

「はいはい」

そんな事がありながらも、隣の町までの行程は順調に進んで行った。やはり街道は安全で、魔獣を見て見たかった俺としては、少し残念だった。

そうこうしているうちに、今から野宿をすれば明日の昼には次の町につく距離まで来た。

野宿の準備を全てし終えた時、俺は前聞いたある事を思い出した。

「なあエリー、前言っていた魔術って言うのは、誰でも使えるのか？」

「あ、魔術ですか？多分ほとんどの人が使えますよ。でも魔術師と名乗れる程の人はそういませんが。私も魔力量はあるんですが、固定化が苦手で、小規模な魔法しかできないんです」

「固定化？」

「ええと、魔力に形を持たせる事です」

何かすごくワクワクして来た。

「詳しく教えてくれ！」

今にも食いつかんとしているかの様に身を乗り出す俺に少しだけ引きながらも、エリーは簡単に説明してくれた。

「受売りなので、ちゃんと説明できるのか心配ですが、頑張ってみます。魔法とは自分の魔力に形を与える事だそうです。魔力は誰の体にもあります。それは普段、血の様に体の中を流れています、その流れを外側に向ける事で、体外に放出します。その後形を与えるんです。例えばこんな風に」

そう言つて右手を顔の前まで上げ、人差し指だけを立てた。するとまるでライターの如く、三センチ程の大きさの炎が現れた。

「私は下手なのでこの位の大きさにしかありませんが、魔術師の人なら人を包み込む程の炎を生み出せるそうです」

「おお！凄いい！なにも無いところから炎が。なあ、どうやれば魔力を外に出せるんだ？」

「ん〜とですね、言葉で言い表すのは難しいんですけど、何かこうさ〜とした物をふっつて感じで」

全然分かん。

「ええと、俺の知ってる気みたいなものかな？」

俺の修得している流淨派では、意図的に体を調整する時に気を使う。気と言いついてはあくまで例えて、精神統一の仕方の一つみたいな物だ。その流れを速くする事で、体感速度を遅くしたり、傷の治りを早めたりといういろ出来る。

これは一様秘術に入る。

これを応用してみれば何かわかるかもしれない。

エリーは、淡い希望を抱き、急に黙り込んだ俺を不思議そうに見ながら待っている。

少し悪い気がするが、もう少し待ってもらおう事にしよう。

《自分の意識を外側から内側へ。気の流れを把握》

此処まではいつも通りだ。

次はその流れを外側へ向けてみる。

初めてやったにしてはすんなり出来た。

《これが多分エリーの言ってる魔力を放出するって事だな》

「だいたい感覚はつかんだ。エリー、形を与えるってどうやるんだ？」

「はっ！あ、クウヤさんが動きだした。はっ！そんな事じゃ無くて何でしたっけ？すいません聞いてませんでした」

「形を与えるってどうやるのかなと」

「それは自分で想像するんです。放出した魔力を認識していれば簡単です。あくまで形を与える事に関してはですが。自然の法則に反する事、空を飛んだり物を自由に操ったりする事は、すごく魔力を

消費します。それに私みたいに効率が悪くても沢山消費してしまします」

「そうか」

何よりもまず実践あるのみ。

さつきと同じ様に魔力を放出し、それを手のひらに集めてみた。

そして真っ赤に燃えあがる炎を想像してみた。

するとどうだろう、手に三十センチ程の火の玉が出来た。

「凄いですクウヤさん！そんな大きな炎を作るなんて。」

だがこれだけでは終わらない。

飛んでみる事にした。

《想像想像っと。無重力空間みたいなのを考えてみるか》

早速やってみると、それ程難しい訳では無い事を知った。

「なんだエリー、結構簡単に飛べたと言うか浮かんだぞ」

その光景にエリーは目を丸くして驚いていた。

「なんで飛んでるんですか！今この魔法が使える人はほとんどいないと思いますよ！」

「そんなに難しく無いけどな」

《ん？までよ。魔術は魔力を固定化する事で使えるって事は、いわゆる想像力で形を与えるって事だよな。それにさつきエリーは、自

然の摂理に反する事をやろうとすると、燃費が悪くなるっていつてたな。と言う事は》

ためしに今思いついた方法で魔術を使ってみた。

「きゃっ！」

一メートル暗い離れた所に突如現れた五メートル程の炎に驚いたエリーは、こちらに駆け寄って来て、また抱きついてきた。

今回は俺は座っていたため、立ったまま抱きついてくるエリーの柔らかい部分が顔に当たる。

その正体に気づいた俺は慌て、急いでエリーを引き離れた。

「はぁーはぁー。あれは俺が出した炎だから大丈夫だ」

集中力を切らしたせいで消えてしまった炎の方を指差し、落ち着かせる様に話しかけた。

「び、びつくりしました。それよりあんな大きな炎、どうやって出したんですか？聞いた事ありませんよ、あんな大きさの炎を生み出す魔術師は」

「それはな、イメージする事で魔力を固定化するって聞いた後、自然の法則に反すれば反する程魔力を消費するって聞いて、そのロスを最小限にするにはどうすれば良いかなって思ったんだ。ためしに科学的に想像してみたんだ。今のは空気から酸素だけを集めて、その分子を高速で振動させた結果だよ」

今の思いつきを簡単に説明してやると、エリーは戸惑った顔をして言った。

「カガクって何ですか？それにサ、サン？」

「さんそ」

「そうです、そのサンソって何ですか？」

「もしかしてこの世界では、まだ科学が発達してない？科学って言うのは、世界の真理を解き明かす学問だ」

少し考えてからエリーは言った。

「学問ですか？でもそんな事聞いた事ありませんよ。学問と言って思い出されるのは神学の事です。そこではこの世界はアスター神が作り出したと言う事を教え込む、いえ、洗脳と言った方が良いでしょう。それだけです。それに空気が何で出来ているかなんて考えた事ありませんでした」

やはりこの世界は学問でも遅れているらしい。

まあ町並みを見ていれば分かる事だが。

と言うか洗脳かよ。

やる事すごいな宗教。

《ん！今面白い事を閃いた》

「なあエリー、今俺の言ったやり方で魔法を使ってみてくん無いか？」

「え、良いですけど。もう少し詳しく教えてください。」

そう言いながら隣まで来て、ピッタリくっついて座った。

「あ、いや、教えるって言っても簡単に教えるだけだから。そんなくっつかなくても」

街道の途中だから誰も見ていないと知っていても、恥ずかしい物は恥ずかしい。

「良いじゃ無いですか！誰もいませんし」

「え、あ、ああ、まあ良いか」

どうにか心を平常に保ちながら、俺は説明を始める事にした。

「まず簡単に言うとな、目の前にある空気はそこに何もなさそうに見えて実はあるんだ。構成している物が余りに小さすぎて、目で見えないだけなんだ」

理解出来ているのかよく分からないが、続けよう。

「そして空気は幾つかの分子って言う物から出来てるんだ。俺達の体とかもこの分子から出来てるぞ。で、空気中で一番多いのは普通じゃ燃えない分子で、二番目に多い分子がさっき言った酸素なんだ。これは一番多い分子と比べて、凄く燃えやすいんだ。まあ厳密には燃えやすいと言うか、燃えるのに必要不可欠って事なんだけど。理解出来たか？」

自分で説明しておいてなんだが、俺はこういうの下手なんだ。

「ん、この空気の中には分子って言うのがあって、二番目に多く

あるのがさっきのよく燃える酸素だつて事だよな？」

厳密には違つが言いたい事をわかつてくれた様だ。

ああ神様。エリーが賢くて助かりました。

「そつだ。エリーは頭が良いな。俺の下手な説明でも一回で理解してしまつんだから。普通じゃそんな事できないぞ」

「そつですか？ やつた！ 褒めてもらえました」

はしゃいでるエリーには、刺激を与えないでどうにか服を着せ替えてもらった。

「で、その酸素を集めて燃やすんだ。振動させるとか分からないと思うから、まずはその酸素をものすごく熱くしてみて。勢いよく燃えるはずだ。まあ酸素が無くなれば燃えなくなると思つけど」

「ん、分かりました。ちょっとやってみます」

そつ言つてエリーは目を瞑り、手を前へ突き出した。

「はっ！」

すると突き出した手の少し前に、一メートル位の炎の玉が現れた。

「や、やったー！ こんな大きな炎を出したのは初めてです！ 凄いです！」

「ふんふん。これはこっちの人にも使えるのか。エリー、この事は暫く俺達だけの秘密にしよう。下手をすると国家規模でパワーバラ

ンスが崩れる」

「え？ああ、そう言う事ですか。分かりました。ふふふふ。クウヤさんと二人だけの秘密。ふふふふ」

少し危ない雰囲気になっているエリー。

何やらぶきながら、ニヤニヤと笑っている。

俺の元の魔力総量が分からない山ってロスがどんなもんだか分からないが、エリーのさっきの様子を見る限りでは、確実に少なくなっているみたいだな。エリーにもっと詳しく教えたら面白い事になるかもしれない。まあ教える側の俺は余り化学が得意じゃ無いけどな。いや、化学だけじゃ無く、物理も魔術に応用できるかもしれない。熱力学とか電磁気学とか使えそうだな。

《もしかしてやりようによっちゃ、レールガンとかコイルガン、陽電子砲とかも出来るかも。こりゃ楽しみだ》

そんな事を一人で考えているうちに、顔の筋肉が緩んでしまったらしい。

「クウヤさん？どうしたんですか？何か面白い物でもあったんですか？」

「いや、さっき言った科学を、エリーに教えてやるのかなと「やります！」思ってたただけだから、って即決！」

「だってそうすれば魔法が上手くなれて、クウヤさんの役に立てるようになりますもの！」

「まあそうだけどね。まあ魔法が上手くて損する事は無いだろうけ

どね。こっちは」

「だから是非教えて下さい！」

「ああ、良いよ」

「やったー！」

《何時も精神的に成長しているような気がするエリーだけど、こっ
やって嬉しがつてるのを見ると年相応だな》

「そう言えば、魔術師ってどのくらいいるの？」

「そんなに多くはありませんよ。魔術師と言っても二種類の人たち
がいて、一方は魔術師ギルドに所属していて研究ばかりしています。
この人達は余り見かけません。何時もギルドに籠ってますから。そ
してもう一方は国に雇われている魔術師です。いい給料をもらって
るらしいですよ」

「へー。雇われ魔術師はどの位強いのか？俺が出した炎と同じの位は
ポンと出す？」

「いえいえ、一人でそんな事出来る人はいませんよ。クウヤさんが
凄すぎるんです。多分ですけど。聞いた話では、何人かで集まって
皆で魔法を使うそうですよ。例えば大規模な戦争の時とかに。です
から魔術師と言うのは後方で控えていて、戦いのはじめに魔法を放
つて役目はお終いらしいです。その分クウヤさんは白兵戦の出来る
魔術師ですね。何だかそう考えると凄いですね。これらどこの国で
も歓迎してくれますよ！」

「そうか、それは良いな。食ってくるのが困ったらそうするか」

冗談めかしてそう言ってみたが、エリーの顔が少し曇った。

「ん？どうした？」

「いえ、そうしたら私は付いて行けないなと」

「どうしてだ？」

「ほとんどの国がアスター教を国教にしているんです。魔人に寛容な国もありますが」

「そうか」

少し空気が重くなってしまった。

「大丈夫だ。お前を置いてそんな国には行かないから。安心しろ」

そう言つてエリーの肩に手を回してやった。

その時微かに肩が震えているのに気づいた。

しかしその時掛ける言葉が見つからなかった俺は、震えが止まるまでそのままできてやる事にした。

その時、ふと俺は思った。

エリーがフードをかぶらなくても、外を歩ける様な所へ連れて行ってやりたいと。

その時はただの思いつきでしかなかった。

しかし世界は空矢を放つては置かなかった。

第九話 挑発と挑戦

エリーに科学を教える事になってから、約二週間が経った。途中である謎が、エリーのおかげで解けた。

なぜ俺がこちらの世界の言葉を話せるのかと言う事だ。

どうも始終魔術を使って翻訳をしていたらしい。

無意識下で言葉が通じるはずと思ってたからだそうだ。

まあ俺が何気に魔力総量が多そうだから出来るわけで、他の人には真似でき無いそうだ。

まあそれは置いといて、エリーはとても勤勉だと言う事がわかった。俺の説明が下手でも理解して、知識をグングンと吸収して行った。

今では中学レベルの簡単な問題なら解ける様になっていた。

とても早い成長だ。

移動中から夜寝る時まで、始終話っぱなしだったのを差し引いても、異様な程の学習能力だ。

《羨ましすぎる。こっちの世界の人が、全てエリー程の学習能力をもっていたら怖過ぎる。てか恨む》

そんなこんなで知識をつけたエリーは、格段に魔術が上手くなった。と言うより、そんじょそこらの魔術師なんか眼でも無い程の力を付けた。

詳しくは分からないが、科学の知識が有る無いでは、格段に魔力のロスする量が違う様だ。

まあそんな事(そんな事って言うても、この事が知れ渡ったらすごい事になるだろう)は置いといて、今俺達は首都から三つ隣にあるそこそこ大きい町に来ていた。

名前はクアワティーラとか何とか言うらしく、俺には言い慣れ無い名前で発音が難しい。

どうも昔の英雄が此処らの生まれらしく、その名前を擦ったとか何とか。

まあこの知識は酒場に入って、そこにいたおっさんに町自慢されたから知っているんだけどね。

俺達は此処で馬を買おうと思っていた。

交易で盛んな町らしいから、いい馬も売ってると思ったのだ。

そこで情報収集の為に酒場に入ったと言う訳だ。

「所でおっちゃん、いい馬が買いたいんだけどどこか良い商人知らないか？」

「そうさなー、中央市場の右手におるの商人が良いと思っぞ。此処らじゃあ、一番大きな馬商人だと思うでの〜」

「そうか、ありがとなおっちゃん」

そう言う訳で、隣でフードをかぶりながらミルクを飲んでいたエリーを連れ、中央市場まで来た。

言われたとおり右手にいくと馬小屋があり、その前にヒゲを生やした渋いおっちゃんが、椅子に座って店番をしていた。

「すいませ〜ん、馬を買いたいんですけど」

「おう、お客かい。どんなのが良いかい？今は結構な頭数があるから、選べるよ」

「ん〜、エリーはどうする？」

「私はどんな子でも大丈夫ですよ。乗馬には慣れてますから。クウヤさんはどうですか？」

「じいちゃんに流鏑馬とかもやらされたから、馬には乗れるけどな。ただ問題がある。馬を選んだ事が無い」

「それなら俺が選んでやろうか？」

ここで天の声が聞こえた。

「ああ、たのめるか？」

「お前さんの武器はその槍かい？なら体力の有るやつが良いだろうな。ちよつと待ってな」

数分後、

「嬢ちゃんにはこの馬な。小さめだが俊敏なのが特徴なランバルの馬だ。んで兄ちゃんにはこの頑丈な軍馬にも使われるリーン産の馬だ」

「よし、それで頼む」

「あいよ！代金はリーン産のが十五銀貨でランバル産のが十銀貨、合わせて二十五銀貨だ」

今回は旅をしていたため疲れが出たのか、エリーは積極的に値切ろうとはしなかった。

結局言い値のお金を渡し、馬を引いてその場を離れた。

その後は市場で必要な物を買ひ揃えて、宿を取り、一泊した。

――――

朝、意識が浮上すると、昨日の夜には感じなかった違和感が隣にあった。

どうもエリーが潜り込んだらしい。

《もう少し警戒しろよ。あれ？俺は少しでも物音がしたら起きるんだけどな？これもじじいの所為だ。慣れるまで満足に寝れなかった。鈍ったか？》

「ん~~~~」

こっちの平均就寝時間は早くて、大体八時位らしい。

この町は大きい方なので、九時頃までは外を歩いている人がいた。

「おいエリー、朝だぞ。起きろ」

エリーも元々こっちの他の人と同じ様に早寝遅起きだったが、俺と旅をしているうちに、俺と同じ遅寝早起きになって行った。

最初は無理していたみたいだったが、近頃は朝も普通に起きる様になっていた。

慣れとは怖い物だ

「んっ、あゝ、おはようございます」

まだ少し寝ぼけているのか、頭をフラフラさせていた。

「おいおい大丈夫か？そんな事やってっつとひっくり返るぞ。って言わんこっちゃん無い」

いつてる合間にも、体をゆらゆらさせていたエリーは、ベットが小さかった事もあり、バランスを崩した。直ぐに落ちそうになったエリーの肩をつかんで、引っ張り上げると、そこではつきり目が覚めたらしい。

「あれ？何で目の前にクウヤさんがいるんですか？」

潜り込んだのも覚えていないらしい。

「いや逆だつて。エリーが俺のところに潜り込んだんだ」

「えーあ、えっと、そんな、自分でも気付いて無くてですね」

慌てるエリーがとても面白かったので、もっとこのままにしておこうかと思つたが、それも可哀想だったので、

「ほらほら、気にしてないから、宿出る準備しよ」

テンションのおかしいエリーに用意をさせる事二十分、一回の部分の所に作られている食堂に来た。

端の方の席に座り、槍を立てかけ、朝食を注文してから、俺は今後の予定を立てる事にした。

「一応レイファスの首都位までなら、今持つてる金で行けるけど、その後の事考えなくちゃな。旅しながら金稼げる職業って言ったら、あの町で登録した傭兵の仕事をやるっきゃ無いかな」

「そうですね。傭兵は依頼がある所へ行き、そこで依頼を受けて報酬を貰い、また次の場所へ向かうと言うのが基本ですから」

「それじゃひとまずこの町のギルド支部へ行くとするか。そこでランクを上げなきゃな」

「それが良いと思います。ランクが低ければ、受けたい依頼も受けられませんからね」

「そうと決まれば早いに越した事はない。これ食べたなら早速行くか」
話している間に、目の前へ置かれていた朝食を指差した。

朝食を食べ終わった後、俺達は宿の女将さんにギルド支部の場所を聞き、槍を担いで人通りの多くなって来た通りへと出て行った。

《やっぱこの槍目立つかな》

外に出た途端、周りの人から凝視された。

まず武器を持っている人が少ない。

そして持っていたとしても、その殆どが剣で、稀に弓を担いでいる人がいる位だ。

槍持ちなんて人っ子一人い無い。

「なあエリー、槍使って珍しいのか？パッと見何処にも槍持っている人い無いんだけど」

「そうですね、言われてみれば私も数人しか見た事ありませんね。個人で使うなら、剣の方が使い勝手が良いからでは無いですか？」

「それもそうだな。こんな長物場所によっちゃ振るえないしな。まあ俺は無手が本命だからいいもの」

「でも最初に相手を圧倒する事ができますよ！」

「それも利点と言っちゃ利点か。ギルドの用意する場所が狭く無い事を願うしか無いな。てか、狭けりゃ無手で行けばいいのか」

そうして着いたクアワティーラのギルド支部は、木造の屋敷みたいな建物だった。

とてつもなく敷地が広い。

「これはギルドが儲かってるからか？」

「多分そうだと思います」

入ってみると、受付は前とよく似た作りだった。

《まずは受付に行ってみるか》

受付の空間は広めに作られていて、間に沢山のソファが置かれていた。

どうやら外に部気持ちが少ないように思えたのは、ギルドに集まっていたからのようだ。

《敵つい人が多いな。優男みたいなのもいるけど》

横見をしながらカウンターまで行くと、そこには若い男の人が座っていた。

「いらっしやいませ。本日のご用件は何でしょうか？」

「ランクを上げたいんで、審査員の人と戦いたいです」

「挑戦ですね。わかりました、どのランクにいたしますか？」

聞かれて思ったが、どのランクの審査員に挑戦するのか決めていなかった。

「なあエリー、俺はどのランクに挑戦すべきかな？」

「そうですね、黒ランクに挑戦しましょうよ！クウさんは強いんですから行けますよ！」

「いや、そのレベルの強さがどの位だか分からないから聞いたんだが。ここは無難に緑ランクにした方が良くないかな？」

するとこちらを面白そうに見ていた受付の人が、

「女の子連れですか。珍しいですね。それに貴方もまだ若いようだ。旅ですか？」

エリーがフードをかぶったままだからか、そう言った。

「まあそんなところです」

まあ当たってはいるが。

「ある程度強さに自信があれば、赤ランクか青ランクに挑戦するのも手ですよ。一か八か黒ランクに挑戦してみると言うのも良いと思いますよ。負けてもペナルティーはありませんから」

「一日に何回でも挑戦出来るのか？」

「はい、出来ます。しかしやる人は余りいませんね。こちらで用意する審査員は中々強いので、相当疲労が溜まると思いますから」

「クウヤさん、黒ランクやっちゃいましょうよ」

横から悪魔の囁きが聞こえる。

何か話し方まで変わってるし。

「黒黒黒黒黒黒黒黒黒」

《ううっ。何か呪われそうな気がしてきた。一応は自分の実力に自信は持ってるからな、ために黒ランクに挑戦してみると言うのも良いな》

「じゃあ黒ランクに挑戦させて貰います」

「そうですか、わかりました。では少々お待ちください」

そう言っただけで受付の人は奥へ入って行った。
するとタイミングを測っていたのか、エリーが話しかけてきた。

「大丈夫ですよ。昔父が雇った傭兵さん確か青ランクでしたが、クウヤさんの方が強かったです」

眼をキラキラさせて見つめてくる。

耳もつられてピクピク・・・

《ふう〜。危なかった。手で押さえなかったらばれてたかもしれない》

「おい、耳動いてたぞ」

頭に手を載せられ、急にそわそわし出したエリーがはっとした。

「あ、危なかったです」

「気を付けろよ。あと俺をそんなに過大評価するなよ。爺曰く、俺はまだまだだそうだからな。爺から一本も取った事が無いんだよな、俺。いや、爺が凄すぎるのか。うん、その通りだな」

一人で納得していると、エリーが、

「クウヤさんのお祖父さんですか？強いんですね。クウヤさんが一本も取れないなんて」

「ああ、あれは強いなんてもんじゃない。あんな平和な世の中で、何処で入り様になるんだか。いや、今俺が入り様になってるか」

「あ、受付の人がもどって来ましたよ」

戻ってきたその人は、

「お待ちせしました。黒ランクの審査員ですが、連絡がつかしました。あと少しでここにくると思いますので、椅子に腰掛けてお待ちください」

どうも遅いと思ったら、連絡を取ってたのか。

「ん？いつもいるわけじゃ無いんだ」

何と無く疑問を口に出してみると、

「はい、審査員は無償協力です。近くに住んでる方に頼んでいます。うちは金銀以外の審査員は揃っています」

疑問が晴れた俺はエリーを連れて、入り口の横にある待合所みたいな所に行く事にした。

しれに引きずられて動く視線。

そう、今俺は周りから痛いほどの視線を感じている。

エリー（子ども）を連れと言うのも珍しいのだろうが、此処で集める視線の殆どは、俺の持つている槍と俺へ向いていた。

外で感じたのとは又違ったそれには、興味と値踏みが半々だ。

ギルドランク白のやつがこんな得物もってたら、そりゃ興味を持つだろう。

《流石傭兵を生業としてる奴らだ。眼付きが違う。大方俺の技量でも予想してるんだろう。パツと見強そうなのは数人しか居ないな。俺程じゃなさそうだ》

自分も周りの傭兵達を評価していると、エリーが話しかけてきた。

「く、クウヤさん。怖いです。何か全身に鳥肌が立っている様で」

大方周りの傭兵たちの視線に慣れて居ないエリーは、精神的に参って来たのだろう。

視線と言っても、そこには強い意思がこめられている。相手を硬直させる程の持ち主は、今ここには居ないが。

「大丈夫だ。心配いらないよ」

そう言いながらエリーの頭を引き寄せ、撫でてやった。

傍目から見たらこのシチュエーションはあれだが、エリーの為だと俺は腹を括った。

ここまで一緒に旅をして来たエリーだが、今だにこういうスキンシップは慣れない。

いやまあ慣れちゃいけない気もするが。

そんな状況だったからか俺は誰かが接近してくるのに気がつくのに遅れてしまった。

横に人の気配を感じた俺は、驚きながらも怪しまれない程度の早さで横を向いた。

その際何気ない風を装いながらも、エリーをしっかりと俺の後ろになる様に移動した。

するとそこにはひよろつとした男が立っていた。

身長は180?程で、全体的にほっそりとしている。

だがそこに有るのはひ弱な感じではなく、何にでも刺さりそうな鋭さが有った。

男は、何処か見下す様に話しかけてきた。

「何んだなんだ？ 餓鬼連れて傭兵やるってか？ お前なに考えてるんだ？ しかも白から黒に挑戦ってお前には早えんじゃね〜のかよ！その得物もお前には勿体無い。お前生意気だな」

何故か罵られた。

この場合はどう対応すればいいのだろうか。

実際にその場になってみるとものすごく難しい。

どうし様かと考えている隙に、先に復活したエリーが牙を向いた。

「何なんですか急に。そんなことあなたに言われる筋合いなんて有りません。それにあなたなんかよりクウヤさんの方が絶対に強いです」

最後のはどうかと思うが、エリーさんよ。
すると男は癩に触ったのかより一層目付きを悪くして、

「何だ餓鬼！殺んのかコラ！」

如何にもヤクザさんなセリフに俺は吹いてしまった。
するとそれを馬鹿にされたと思ったのか、エリーから俺に視線を移した。

「お前だよお前、此処はお前みたいな奴の来るとこじゃねえ。さつさと帰れ」

俺はさつきから感じていた目線が変わった事で、目の前の男の事が少し分かった。

周りの目線の殆どが言外にご愁傷様と言ってるのだ。
その事から考えるに、目の前の男の行為は日常茶飯事で毎度の事の様だ。

「そうは言われてもなあ、お前にゃ関係無いだろ」

此処まで馬鹿にされるとは思ってい無かったのか、眼に怒りを浮かべて続きを話そうとしたとき、急にギルドの外に面した扉が音を立てて開かれた。

そこにはギルドの人であろう、受付の人と同じ服をきた青年が、息を切らして立っていた。

想像以上に大きな音を立てて開かれた扉で視線を集めた事に気がつくくと、恥ずかしそうに身を縮ませ、小走りに受付の所まで走って行き、その人に耳打ちをした。

俺とエリーはそれをついつい眼で追ってしまい、横にいた男もその

雰囲気、気を抜かれてしまったのか、小さく舌打をして少し離れた椅子へ座った。

青年の話を聞いていた受付の人が少し困った様な顔をしながら、俺の事を呼んだ。

「ハシロさま。少々よろしいでしょうか？」

相変わらずこの受付さんは丁寧語だ。

「ああ、何だ？」

エリーを連れてカウンターまで行くと、

「黒ランクの審査員をするはずの人が怪我をしてしまったらしく、此処にこれないそうなんです。本来なら前もって把握しているべきだったのですが、何故か報告が来ていなかった様です」

「そうか。それじゃ試験は出来ないかね」

「それなんです、ギルドで用意した方以外にも一般の方でも出来るんです。ギルドでやってもらはなければいけません。それに相手によってはなにか条件を出してくるかもしれません。ギルドの様に無償協力では無いので」

「そうですか。なら誰かに頼んでみようかな」

そう言った瞬間、なんだか嫌な予感がした。

「どうしたんですか？そんな顔して？」

そうエリーが声をかけてきた瞬間、

「なんだ？困ってるみたいじゃねえか。なぐんなら俺が相手になつてやるうか？」

そう言つて厭らしそうに笑っているのは、先程絡んできた男だった。

《相変わらず無性にイラつくしゃべり方だ》

一見弱そうに見えるが実際はどんなのか分からないから、無闇矢鱈に頷く事はしたくない。

「良いでしょう。あなたとクウヤさんの格の違いと言うものを見せあげましょう」

おいおいエリーさんよ、俺抜きに話しを進めるなって。

「良いじゃねえか。ん？こう見るとおめえ以外といい顔してんじやねえか。よし、俺が勝つたらお前は俺のもんだ」

「良いでしょう。あなたが勝つなんて事はないんですから」

「おいエリー、いくらなんでもその条件は無いだろう」

「クウヤさんは負けると思ってますか？」

「それは無いと思うけど。何事も可能性つてものがなあ」

「大丈夫です。私は信じてますから」

「ダァー！ー！！ ハァ〜。分かったよ。試合のルールは？」

結局根負けした俺は話を進める為に受付の人に話しかけた。

「基本なんでも有りです。ただ相手を殺してはいけません。それ以外は全力で行って下さい」

「魔術は？」

「あなたは魔術を使えるんですか？それなら使っても良いですよ
少し驚かれた。

魔術を使える傭兵は少ないのかもしれない。

「そうか」

これで心配事は無くなった。

あの反則みたいな力があつたら、大抵の事にも対応できるだろう。
もし負けでもしたら、エリーが魔人だと言つのがばれてしまう。

《何がなんでも勝たなければ。どんな手段を使つても。フフフフ
フフ》

俺が腹の中でなにを考えてるのかも知らずに（エリーは横でニコニコしている。よ、読まれてるのか！！）男は、

「よし、今すぐやるぞ」

そう言った。

それに答える様に受付の人が、

「ではこちらへ。試合場へ案内します」

鍵を片手にそう言った。

――

今日の前にはギリーが両手に30cm程のダガーを持って立っている。

ギリーと言うのはギルドで絡んで来た男だ。

他の傭兵達が噂をしているのを聞いて名前を知った。

その噂によれば、此処らでは疾風のギリーと言うあだ名で有名らしい。

もちろん強いからだ。

勿論、悪い方にも有名らしい。

二本のダガーを巧みに操って相手を倒すらしい。

もちろん黒ランクだが、実力は銅ランクに達しているのでは無いかと誰かが言っていた。

あくまで噂だが。

その為俺は無謀な賭けに出る世間知らずの初心者と言う眼で見られている。

世間知らずと言うのは当たってるが。

目の前の光景に話を戻すとしよう。

あれから受付の人に連れてこられた所は中庭で、だからと言って花が植えられているわけでは無く、地面全てが煉瓦で覆われている。戦う為に作られた広場だ。

その証拠に一面だけ人が観賞出来るスペースが作られている。

そこももう満員の様だ。

どっだけ暇人がいるのやら。

殆どの観客は俺が勝つと思っではないのか、先程俺がギリーと交

わした条件について語り合いながら、俺をかわいそうなものでも見る様な眼で見ってくる。

まだ勝ちが決まっていけないと言うのに。すると後ろから熱い視線を感じた。

振り向くとそこには審査員と一緒にこちらを見ているエリーがいた。エリーだけは俺の勝ちを疑ってないのか、ニコニコしながら手を振ってきた。

手を振り返してやっていると、

「はっ、余裕だな。その余裕がいつまで持つのか見ものだ」

ギリの挑発を聞き流して、俺は審判の人に声をかけた。

「どちらも準備出来たし、そろそろ始めてもらえるか？」

「分かりました。では簡単にルールを説明します。今回はランク昇格試験の戦いですので、相手の命を奪ってはけません。勝ち負けは相手を戦闘不能に、気絶させるなどで決まります。死ななければなにをしても良いです。制限時間はありません。試合場所の範囲制限もありませんが、なるべくこの中庭で戦って下さい。以上で説明を終わります。それではお二人の健闘を祈って、試合開始の合図をしたいと思います。では試合始めっ！！」

先ず動いたのはギリだ。

そのスピードはなかなかのものだった。

やはりギリは早さを生かして戦う様だ。

対して俺は、長槍を構えて動かない。

槍は頑丈な木で作られているもので、そこそこの重量のある物だ。

構え方は片手で柄を持ち脇に挟み、空いている手の方を半歩前に出している。

普通の槍の構え方とは違うのは、棒術の応用で槍を使うつもりだからだ。

俺が習得している流浄派は基本の拳術に加え、剣術（もちろん西洋剣ではなく日本刀だ）と棒術を軸に、多種多様な技を持っている。基本は無手で敵地に潜入し、暗殺や情報収集をし、また戦場では相手の武器を奪いつつ戦場を蹂躪する。

最盛期は門下生も多く規模の大きな流派だったが、相手の武器を奪う事や、ましてや暗殺すらこなす流浄派を、武士道精神に反する汚れた流派だと弾劾され、今では恐らく俺と爺しか継承していない流派だ。

大方当時大きくなって行く流浄派に対して、昔から続く大御所が自分達の地位を心配したのであろう。

閑話休題

それはおいとき、動かずにいる俺に対しギリは無謀にも真つ正面から突っ込んで来た。

恐らく俺がスピードで格段に劣っていると思ったのだろう。

俺は内心、木製の棍（木と言っても実用に耐えうるものだった為、相当重い）を二本両手に持ちながら襲いかかって来る自分の祖父を思い出し、ギリのそれとを見比べて、内心溜息をついた。

どの位強いのかと予想していたよりも弱かった事を残念に思ったのだ。

目の前まで接近したギリの右からの攻撃を首を傾げる事によって交わり、左に持ったダガーが襲いかかるよりも早く、脇に抱え込んでいた槍の石突きの方を、下からすくい上げるように振り上げた。槍の間合いの内側に入る為と、自分の武器の間合いに入るために接近し過ぎていたギリはそれに気付かず、最小限の旋回で回った石突きは、俺の目論見通り左手の手首を打ち据えた。

その際身の毛もよだつ様な音がして、ギリは左手に持っていたダガーを落とした。

「ゲギヤ！」

悲鳴をあげつつも右手のダガーは落とさずに、思いつ切りバックス
テップをして此方と距離をとった。
なにが起こったのかわからない様な顔で自分の左手を横目で見てい
る。

それもそうだろう。

おれは棒術の型で槍を振り回しているのであって、切断よりも打撃
を重視した使い方になっている。

個人で槍を使う人が少ないのも合間って、俺の戦法を見誤ったよう
だ。

パツと見刃の方で攻撃してくると思ってしまうのはいた仕方ない。

今だ惚けているギリーを見て興冷めした俺は、早いとこ試合を終わ
らせる事にした。

槍を地面の煉瓦の隙間に突き刺し、軽いステップでギリーに近付い
た。

軽いステップと言っても足の運びがそうであるだけで、とんでもな
いスピードが出ていた。

普通の人にとっては何時の間にも移動したのかわからなかっただろう。
流石に惚けている場合では無いと気づいたギリーは、生き残ってい
る右手のダガーを全力でふるった。

慌てた余り大振りになってしまったその腕を懐まで入った俺は片手
で掴み、もう一方の手で服の襟を掴み、そのまま振り返って背負い
投げをした。

地面に叩きつけられ息につまったギリーに、俺はジャンプし、その
まま空中で体を捻り、肘を鳩尾に叩き込んだ。

これまた嫌な音がしたが、手加減した為ひびが入った程度だろうと
予想し、少し離れた。

立ち上がってこないのを確認した俺は、審判の方を向いて言った。

「これでいいのか？一応気絶しているだけだが」

その一言で正気にもどった審判は、

「この試合の勝者、クウヤ・ハシロ。結果、ハシロ様は黒ランクに昇格しました」

審判が宣言した瞬間、静まりかえっていた観客席で歓声が上がった。俺がここまで出来るとは思っていなかったのだろう。

そこにエリーが駆けて来た。

歓声に冷やかす声が入った気がしたが気にしないでおう。

「凄いです！！クウヤさんが強いのは知っていましたが改めて驚きました！！」

顔を真っ赤にして力説しているエリーの後ろを、ギリが担がれて行った。

呻いてるのもお構いなしに引きずっている事から想像するに、いつも威張っているギリの事を快く思っている人は少なさそうだ。

未だに興奮冷めやまない様子のエリーに、

「さて、ランクも無事上がった事だし此処からおさらばするか。まだ日も高いし市場でも見てくるか」

そう言っって話を振ってやると。

「そうですね！昨日は馬を購入しただけで余り見て回る事が出来ませんでしたからね。でもその前にギルドで何か依頼を受けて行きませんか？どのみち何か受けなくてはいけませんし」

食いついて来た。

「ああ、依頼の事すっかり忘れていたよ。ランクの事ばかり考えていたしな。よし、近場でこなせる依頼を探してくるか。そう考えるとなんだか楽しみになって来た！まるで遠足前の子供みたいだな、俺」

「エンソク？」

少し首を傾げ、眉を寄せて此方を見て来る。

その仕草のかわいらしさといえはもう言葉に出来ない。

「え、伝わらない？翻訳出来てないのか？」

その顔に見惚れながらも返事を返すと、

「はい、エンソクと言う言葉は聞こえますが、意味は分かりません。どちらも意味のわかる言葉で無いとちゃんと翻訳されないのではありませんでしょうか。でも今のクウヤさんが楽しそうなのは見て分かりますが」

小さな声で笑いながらそう言って来た。

「ふーん、なるほどなるほど。やっぱりエリーは頭が良いな」

そう言って頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細めた。

まるでペットの犬の首を搔いてやっているようだ。

頭から手をどけて周りを見回して見ると、観客席のところにいた奴らも殆どいなくなっていた。

「ええと建物の中に入る扉はどこだ？あ、彼処か。エリー、戻って来い。依頼見に行くぞ」

何処か遠くを見たまま、頭を撫でていた時の体勢で固まっていたエリーに声をかけた。

「はっ！いけない、なんだか心地良い夢を見てました。えっと何でしたっけ？依頼の話でしたか？」

「そうそう。中入って見て来ようって言ったんだ」

「はい！」

「さて、どんなもんがあんのかね」

そう言いながら扉をくぐり、先程とは逆の道順でホールまで戻って行った。

「そう言えばあいつ、ギリだっけか？本当に黒ランクでも強い方だったのかね。なんかすごく弱かった気がする。これなら銅も狙えてしまいそうだよ」

「あ、それは私も思いました！前雇った黒ランクの傭兵の方はもつと強かった様な気がしました。もしかしたらこの街にはあまり腕の良い傭兵がないのかもかもしれませんね」

この街の傭兵が聞いたら逆上しそうなセリフを、その傭兵の拠点であるギルド内で言った。

まあ幸い廊下で誰もいなかったが。

「おいおい、そんな事言っちゃいかんだろ。怒られるぞ。まあでも此処の奴らを基準にはしない方がいいとは思っけどな」

そんな会話をしながら歩いていると、ようやくホールに辿り着いた。

第十話 エリーの挑戦

その瞬間騒がしかったホール内が水を打ったように静かになった。その突然の現象に驚いた俺はその場で立ち止まってしまい、横で引っ付いていたエリーが肩へぶつかって来た。

「ど、どうしたんですかクウヤさん。あれ？何で皆さん急に静かになっただんですか？」

「さあな。おれに……」

は関係ない。と続けようとした瞬間、部屋にいた傭兵たちが一斉に歓声をあげた。

実際にはそこまで大きな声では無かったのだが、直前まで静かだった事もあり大きく聞こえた。

俺はあまり関わりたくないと思いつながら、「にいちゃん強いんだな！」だとか「俺のパーティーに入ってくれないか！」だとか「弟子にしてくれ！」だとか「ギリーの奴をぶちのめしてくれてありがとうよ！」、さらには「その嬢ちゃん俺にくれな…んぐぎゃ！」とか言いながら騒ぐ連中を無言で交わしながら（ちゃんとエリーの手を握っている。もちろんほかの奴らに触れさせはしない）本来の五倍近い時間をかけて、やっとこ受付のところで辿り着いた。

最後のはあれだ、そうあれ、なんて言うか勝手に手が動いてそいつの顎骨に指かけて投げ飛ばしたただけだ。

うん、何も問題は無い。

—————

あの興奮はひとまず落ち着いたのか、いまは遠目に此方を伺い、色

々とこそと話すにとどまっている。

「何だかよくわからない事に巻き込まれたが、まあまずはエリーの登録をしようか」

俺はエリーのギルド登録をする為に受付の人に声をかけた。

「すまんがこいつの登録をしたいんだが」

そこにはまさに受付嬢、というのが似合う綺麗な女性がいた。さっきの男の人から変わったのだろう。

「え？登録ですか？その子がでしょうか？」

「ああそうだが。……何か問題でもあるのか？」

「ええとですね、あくまでここは傭兵ギルドであって、戦いが仕事になるんです。ですから戦えない方の登録を許可するわけにはいきませんよ」

14歳相応の外見から、エリーに戦闘能力が無いと判断したのかそう言った。

「いやー、外見で判断してはいけません。傭兵ギルドの受付何かしていたら、そんな事はたくさんあるんじゃないか？」

その言葉を聞いたその女性は納得しないような顔をして言った。

「それはそうですが、体を鍛えているようには見えませんし、況してや魔術はその年では攻撃に使える物を修得しているはずも無いで

すからね」

そう言いながらエリーのフードの中を覗き込む様にジロジロ見た。すると今まで睨めつける様に女性を見ていたエリーが言った。

「これでも私魔術師です。そんじょそこらの魔術師には負けませんよ！」

そう言っていない胸を張って踏ん返り返る様に言った。

まあそんじょそこらの魔術師どころか、おそらくこの世界で一番強いんじゃないだろうか。まあ俺は抜いているが。

「そんな事言っても見えない物は見えないんです」

半ばムキになりかけている受付の女性を遮る様に俺は口を出した。

「まあまあ落ち着け。そんなに信じられないのなら試合をすればいい」

ここで戦えば勝つのは確実だから今もめている事は解決するし、エリーにとっても良い経験になると、一石二鳥だと思ったのだ。

「それは良いですね！流石クウヤさんです」

エリーはどこか興奮した様にはしゃいでいる。

それは置いておいて、俺は話を進めた。

「此方に何があっても、例え怪我をしたとしても責任は此方で取ります。そちらには迷惑をかけず、もしかしたら優秀な魔術師をギル

ドに引き入れることができる。そちらとしてはそんなにリスクは無いとおもいますが？」

ギルドは依頼を受け、それを傭兵に回す事によって仲介料を取っている。

また、直接ある特定の傭兵に依頼を回す事もあるそうだが、そこそ高ランクの傭兵、または特殊技能を持った傭兵のみの話だ。

それは有名で強ければ強い程高くなり、ギルドにとってはいい収入源なのだ。

一応他にも宿や飲食店を経営し、利益をあげている。

しかしギルドの収入源の大半を占めるのが仲介料だ。

低いランクの傭兵の仲介料では高が知れているが数が多い。

世界のほとんどの傭兵がこの傭兵ギルドに登録している。

フリーの傭兵もいる事にはいるのだが、依頼を得る事が難しい為に少数だ。

それを踏まえてこの提案を試してみたのだが、なかなか効果があった様だ。

「それはいい提案ですね。ギルドに不利になる事ありませんし、その子の言ってる事が本当かどうかを知るいい方法ですね」

どこか黒い笑みを浮かべながら返事をする受付の女性。

何か背筋がスーッと寒くなる様な笑みだ。

こんな人が受付をやっているのか疑問に思ったが一応流す。

うん、触らぬ神に祟りなしだな。

「あ、どうせならここにいる中で一番強い魔術師と戦ってみましょうか？」

ふざけた様にエリーを見て言った女性にエリーは言い返した。

「良いですよ。クウヤさんも良いですよね？」

「ん？いいんじゃないか？」

そう言っただけで俺が返事すると受付の女性は驚いたのか、目を見開いて言った。

「本当にやるんですか？冗談で言ったんですけど……」

「そうなのか？まあ万が一にもエリーが負ける事なんてないと思うけどな」

少し見下す様に見ながら返事をしてやった。

「はあく。私はちゃんと止めましたからね。今回は特別に許可しましょう。誰か傭兵ギルドの会員証を持つ魔術師と戦い、相手が戦えると保証したらその子に会員証を発行しましょう。それで良いですね？」

エリーが勝つとはちっとも思ってたなさそうだ。

まあ此処まで条件が揃えば良いか。

「ああ、それで良いぞ」

そう言っただけで受付の女性は立ち上がり、ホールの中にいる人に声をかけた。

「この中に魔術師の方はいますか？ 皆さん興味津々のようで、聞き耳を立ててたようなので分かると思いますが、この少女と魔法戦

をやってもらいます」

受付から立ち上がった彼女は、そう言っただけでホールをみまわした。先ほどの試合の影響か、俺達に注目していた傭兵達が多かったらしく、その言葉が響いた瞬間時間が止まったかのように話し声が止んだ。

その雰囲気少し居心地の悪さを感じたが、じっと我慢する。注目を浴びる事は元の世界でもあった事だが、いまだになれる事が出来ない。

数分を感じた数秒の後、一人の男が近づいて来た。

「私でよければお相手いたしましょう」

ぱっと見、元の世界ではサラリーマンとして働いてそうな草臥れた服を着た中年の男だが、その鋭く光る瞳を見ればそれが間違っている事がわかる。

「私は青ランクですが魔術に関してはこの付近で一番の知識量だと自負しています。魔術戦のルールであれば、この挑戦を受けましょう。あ、私の事はルドヴァーと呼んで下さい」

よっぽど自分の魔術に自信を持っているのであろう態度で、こちらを、と言つよりはエリーの事を見てくる。

「他にはいませんか？いないようでしたら締め切りますよ」

そう言っただけで席に座り直した彼女は俺達に向き合い、言った。

「それではルドヴァーさんと魔術戦という事でよろしいですね？」

「ああそれで良い。で、ルールは？」

隣で少し興奮気味のエリーを横目で見つつ、聞いた。
「言うかエリーはこんなに好戦的だったか？
まあ、やる気があっていい事だ……うん。」

「ルールは単純で、攻撃方法が魔術による遠距離攻撃のみという縛りがあるだけです。立ち位置を決めてそこから動いてしまった方は失格となります。相手を押し出す事が出来るかが勝利の決め手ですね。もちろん相手に降伏させても良いです。最後になりますが、前提条件として殺生は禁止です」

近接戦を禁止して、中距離からの魔術の応酬のようだ。
俺は横を向いて、エリーにだけ聞こえる様に言った。

「今回は初級魔術だけで戦え。威力は抑えろよ。今でも目立ってるが、強すぎて目立つのはいろいろと面倒だからな」

「分かりました」

そう言っただけでエリーは頷いた。

初めて魔術の話聞いたあの日から、俺はエリーに化学を教えている。

そのついでと言ってはなんだが、術が成功しやすくなる方法を考えてみた。

教える側としてもある程度法則みたいなものがあると便利だなと思っただけだ。

魔術についての知識はあまり出回ってはなく、基本の所である魔力を感じる方法と発動するために想像力が必要だという事ぐらいしか知られていない。

魔術師というのはその力が自分の価値を決めると言っても過言では無いため、自分の知識を周りに漏らさない者が多い。

エリーは魔族だという事もあり、比較的と言うどころか、すごい適性があったために、独学に近いながらも魔術を使える様になったらしい。

しかし普通の人にはそれは難しい事であって、魔術師になりたい時は使える人に師事するしか方法はない。

その為魔術師が少ないという状況が出来上がる。

話がそれってしまった、元に戻そう。

上手く魔術を使い為に、色々な事を試してみた。

事の始まりは、俺がファイアと言いなながら炎の塊を射ったことだ。

現代人なら誰しも一度はやってしまおうと思う。

まあそれは置いておくと、その時エリーにどう言う意味なのかを聞かれ、それに対して、「魔術を発動するための呪文みたいな物だ」と言うと、エリーもそれを真似して魔法を打つようになった。

エリー曰く、名前がある方が魔術が安定しやすいらしく、他の物にも名前を付けようと提案してきた。

その結果、元の世界のゲームのような設定に行き着いた。

まず初級魔術。

これはそのまま現象を起こす魔術の事で、この世界の魔術でも存在しており、一番簡単な攻撃魔術として知られている。

炎を飛ばしたり、水を飛ばしたり、鎌鼬を作り出したり、地面を隆起させたりと色々あるらしい。

まあ一工程の魔術の事だ。

名前は英語訳だ。

単純な方が覚えやすいし、単語として覚えておけば応用もできる。

いい事づくめだ。

そして、初級と言うのだから中級もあるのだが、ここでは使う予定は無いだろう。

「本職の技も見て見たかったからな。いい機会だ。最初は少し様子を見つつ戦え。観察する時間が欲しいからな。それと危なくなつたらすぐに棄権しろ。早々あるとは思えんが念のためだ。……約束だぞ」

最後の念押しは特に強く、言い聞かせる様に言った。

「はいっ！頑張ります！」

「ああ、頑張れよ」

――――

ところ変わってさっきの中庭に戻って来た。

観客も俺の時より多い位だ。

魔術師同士の戦いは珍しいらしく、暇な奴らがこぞって来たからだ。傭兵とはこんなにも暇な奴らばかりなのだろうか？

そう思はずにはられない。

まあフードから覗くエリーの顔が可愛らしい少女の物だと言つのもあるのかもしれない。

今回は先程の逆で、俺は審判の横で腕を組んでエリーを見ている。

緊張のかけらほども無い様な、晴れやかな顔が覗ける。

対する相手の……。

名前が思い出せないが相手の男は、手に小振りな、二十センチ程の木製の杖を指揮者の様に構えている。

「それではルドヴァー氏とエリー嬢の魔術戦を始めようと思います。ルールは攻撃方法を遠距離魔術のみとし、相手をスタート位置から動かした事を勝利条件とします。なので、いま立っている足元の赤い四角から出ないでください。なお、試合中の殺生は認められま

せん。……それでは両者、始めてください！」

審判役のギルドの男の人がそう言った瞬間、ルドヴァーが腕を横に
屈しながら言った。

「我は求む。風を支配し精霊よ、敵を切り裂く風の刃となれ」

するとどうした事だろうか、ルドヴァーの手元から何かがエリーの
元へと飛んで行くのが見えた。

さっきの言葉からも想像出来る通り鎌鼬か何かの様だ。

その速さはなかなかの物で、相当余裕を持って立っていた両者の間
を駆けて行った。

エリーはそれを見つつ、しかし何も反応を示さない。

残り二、三メートルになった所でルドヴァーが焦った様に言った。

「お、おい！術が間に合わなくなるぞ！」

加減しとはいえ、攻撃魔術である。

少女の体に当たったらどうなる事かは直ぐに想像出来る。

二、三メートルでは呪文を唱える必要のある魔術では防げない。
唱えるよりも速いからだ。

今回程のものなら、普通のバックラーでも防げる物だったが、エリ
ーはそれすら持っていない。

だからルドヴァーは焦ったのだ。

しかしそれでもエリーは慌てず、残り二メートルをきったあたりで
ボソッと呟いた。

「ロックシールド」

その瞬間、鎌鼬とエリーの間を何かが遮った。

それはレンガの地面を突き破って生えて来た石の壁。

表面はゴツゴツとしていて、全体的にはエリーを包み込むかの様に曲線を描いている。

鎌鼬はその壁にあたり、消え去った。

壁は何事もなかったかの様に聳え立っている。

「キャンセル」

すぐさまエリーは呟き、それと同時に壁は地面へと戻って行った。

想像力の不足か、レンガは剥がれ落ち、ポツカリと穴が空いてしまっている。

それを見たルドヴァーは開いた口が閉じないのか、目を見開いてエリーを凝視していた。

「大丈夫ですか？そちらからこないのでしたら私から行かせてもらいます」

どこかウキウキした表情でそういうエリーは、とても生き生きしていた。

最初は少し様子を見つつ攻撃しろと言った事を完全に忘れていた。

まあ一回でも見れたからいいとするか。

エリーの言葉で正気に戻ったルドヴァーに言葉を挟む暇も与えずに、今度は先程よりも少し大きめな声で言った。

「ダンシングフレイム！」

するとエリーの周りに三つの赤々と燃える火の玉が出現し、クルクルと回り出した。

「ちゃんと防いでくださいね」

警告を与えると同時に、三つの炎をルドヴァーへと飛ばした。本来ならもつと多くの炎を生み出して、時差を付けつつ全方向から当てる様な物として作った術なのだが、どうも手加減した様だ。

「な、何だその魔術は！そ、それにその詠唱は！わ、我は求む。風を支配し精霊よ、業を防ぎし変わり身となれ！」

慌てながらもどうにか発動させた魔術は、敵の攻撃との間に幾つもの空気の壁を作り、威力を削ぎつつ最後には消し去る技のようだ。だがエリーの炎はそんな物もお構いなしに突き進み、空気の壁を突き破って行き、最後の壁の所で爆発した。

そう、この呪文は炎を敵に当てるだけでは無い。当たった瞬間爆発すると言うより凶悪な物である。

ただ今回はそれだとまずいので、ルドヴァーを吹き飛ばす為に手前で爆発させた。

その結果最後の壁で少し威力を削がれた爆風がルドヴァーを襲い、そのまま体を一メートル程吹き飛ばした。

少しは熱もあつただろうが、致命傷にはならないだろう。

まあ、これでエリーの勝利は確定した。後で頭でも撫でてやるう。

審判のエリーの勝利を宣言する声を聞きつつ、そんな事を考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9926o/>

漆黒の戦神

2011年9月6日15時30分発行